カントの此の哲學的主張は、今や自然科學の歸納的研究によつて、動かすべからざる根據を與へられた。ヨハンネス、ミュルラー氏によつて發見せられたる、『感覺神經の特殊勢力の法則』Gesetz von der spezifischen Energie des Sinnesnervens は、即ち夫れである。今、試みに、視神經を刺戟するに、「エーテル」の波動を以てするも、電氣を以てするも、器械的壓力を以てするも、其の結果は常に同一で、光なる感覺を起す。之れと等しく、聽神經は、之に如何なる刺戟を加ふるも、毎に音を感じ、又味神經は、常に味覺を起す者である。次に電氣なる同一刺戟を、種々なる感覺神經に働かすに、視神經に於ては光覺を、聽神經に在りては聽覺を、味神經に於ては味覺を、皮膚神經に在りては、處に從ひて、痛・溫・寒・觸・等の諸感覺を起す者である。由是觀之、如何なる感覺が生起するかは、決して、外より働く刺戟其の者の性質によつて、決定さるゝ者でなくして、一に、各種の感覺神經が、先天的內的に具有せる特殊の勢力によつて定まる者である。「是れ即ちカントが、吾人が外界に關して有する直觀、換言すれば、現象界なる者は、決して「物自體」によつて、外より與へらるゝ者に非ずして、一に內的・先天的に、吾人の心に具有せる特殊の能力によつて、造り上げらるゝ者であると論じたとゝ、符節を合はす樣に一致して居る」恰も吉田口から登た人も、御殿場より進んだ者も、玆所絕頂に到達しては、共に金明水・銀明水の甘露に舌を鼓するの感あらしめるのである。

斯くヨハンネス、ミュルラーが、感覺生理の實驗的研究の事實より歸納せし結論と、カントが、哲學的批判によりて到達せし結論とは、全然一致して居るが、併しヨハンネス、ミュルラーは、カントの如く、時間及び空間の如き者を以て、先天的の純直觀と見做さずして、矢張經驗より導かれたる、抽象的能力の產物であることを明にせんとした。

ミュルラーの高弟ヘルムホルツは、進みて、認知すべき主觀（スブエクト）と、認知されたる對象（オブエクト）、換言すれば、內的表象と、外的實在との間に、如何なる

關係ありやとの大問題を論じて居る。ヘルムホルツも亦、感覺神經の特殊勢力の法則から出立した。彼によれば、あらゆる感覺の性質は、一に、刺戟を受容すべき感覺神經の特性によつて決定される。同一の輻射線でありながら、眼に入れば光の感覺を、皮膚に當れば、溫の感覺を起すではないか。等しく橙紅色に見ゆる物でも、或る者は橙色の光線のみを反射し、他の者は黃色と紅色の光線を反射し、更に第三者は、紅色・橙色及び黃色の光線を反射する。乃ち、橙紅色なる同一の感覺を與ふる物でも、其の內的構造、即ち其の本質は、各自異つて居るのである。換言すれば、感覺は、實在せる者の標號に外ならぬ。如何なる標號を附するかは、全く勝手であり、隨て、標號と實在の本性との間には、何等根本的の關係を有する者でない。恰も如何なる名前を附けやうとも。名前と其の人の本性とに、何等の交涉關與する所がないと同一である。

彼は又、其師ヨハンネス、ミユルラーと同じく、カントの所謂、經驗と全く無關係に先天的に具有せる、純直觀なる者の存在を否認し、時間・空間の如きも亦、後天的に、經驗を基礎として發達せる者たるとを主張した。彼は、『幾何學の實際的根據』と題せる論文によりて、幾何學なる者は、ユークリッドによりて、空間が三の「ディメンジオン」を有つ者として組織されたのであるが、併し、吾人は、他の原則の上に成り立つ幾何學によりて、之れと性質を異にせる空間を想定し得る者であるから、隨て空間なる表象は、決して先天的に吾人の心に存する者ではなくして、感覺に基づく經驗によつて、後天的に發達した者と考へねばならぬ理由を明にして居る。彼は又、『認識論より見たる計算及び測量』なる論文を公にして、時間及び數なる直觀に關して、其の起源を論じて居る。之によれば、計算とは、畢竟、數へたる物を、時間的順序に從ひて整理するの謂に外ならぬ。而して、此の簡單なる精神的作業に向つては、各個の感覺を別々に區別し、且つ其の中の共通なる者、類似せる者を、一括する丈けの能力

を前提すれば、それで足りて居る。斯くて彼は、算數の原理を闡明せんと力めて居る。

ヘルムホルツは、更に論歩を進めて曰く、已述の如く、感覺は、外界事物の眞相に關しては、直接何等吾人に告ぐることなきも、併しながら、此の兩者間に於ける必然的の結合は、吾人の思考及び欲求と、全く無頓着に行はるゝ點より察すれば、外界に實在せる事物ありて、之が吾人の心によつて左右せられずして、却て彼れ自から、吾人の心に働きて、感覺を喚び起し、意識に作用し、以て外界を認識せしむることを思はしめる。例へば、茲に一塊の黄金がある。之に觸るれば、冷く、堅く、滑かである。之を叩けば、錚々たる音を發する。之を扛ぐれば重く、之を放てば地に落ちる。其の大さ、其の形狀に關しても亦、たとひ意識狀態は著しく變化して居ても、何時でも同樣なる感覺を起す者である。斯く現象界の關聯が、吾人の心的狀態が尠なからず變化して居ても、毎に同一なる有樣に於て、吾人に現はれ來るとは、此の者が、獨り吾人の內的直觀に關係を有するのみならず、又外界に於て、或る規律の存在するありて、之が根柢を爲すことを思惟せしめる。此の、吾人の表象に無關係に存在し、諸現象の原因たるべき者、是れ即ち『力』と稱する者である。又現象界の後に於て、實在せる者を、『物質』と云ふのである。而かも此の『力』及び『物質』なる者は、實は一の假說的概念であつて、吾人が觀察せる現象界に於ける事物の關係を、標號的に、容易く理解せんが爲に設けられたる者に外ならぬ。其の本性に至りては、毫も吾人の與り知る所でない。而して、是れ即ち知識の限界である。吾人の認識は、茲に至りて窮まり止むのである。ヘルムホルツは、斯の如くにして、カントの現象說に更に一歩を進めて、自然科學の衣と食たる、『物質』及び『力』なる者の意義を明かにし、且つ之に基いて、自然界の認識に限界あることを敎へた。

ヴントも、其の哲學的系統を、自然科學の基礎の上に組織した一人で

ある。「彼も亦、ヘルムホルツと同樣に、吾人が外界に關して有する表象は、啻に吾人の直觀によりて左右せられざるのみならず、現象界と事物の眞相との間には、一定の交渉を有ち、而して、時間・空間の如き概念も、決して先天的でなく、後天的に、經驗によつて發達し來れるものである」と說く點に於て、カントと相反せる見地に立つて居る。彼によるも、亦事物の現象は、吾人の思考と無關係のものである。隨つて、外界より吾人の心に與へらるゝ者で、決して吾人の意志に從つて、造り上げらるゝ者ではない。彼は、其の著「論理學」に於て、事物(ゲーゲンシュタンド)を定義して

性と、時間的恒久性とを有する者である。多數感覺の結合(コムプレックス)で、空間的獨立と云つて居る。故に、彼によれば、事物なる概念は、外界の必然的現象であり、又同時に、吾人の認識に與へられたる諸現象の、眞實なる關係を意味して居るのである。而して、吾人の思考によつて左右せられざる現象界の、此の眞實なる關係は、事物として吾人に現はれ來る外界なる者の、本體(オブスタンツ)の實在を證明するに足る者ではあるが、併し本體夫れ自身は、決して吾人に知らるゝ者でなく、何所迄も形而上學的概念であるとした。即ち彼も亦、本體とは何ぞや、換言すれば、認識する主觀(スブエクト)と、認識せらるゝ客觀(オブエクト)との關係如何てふ、最古の問題に到つて、其所に自然界認識の境界を劃して居る。

之を要するに、此等偉大なる自然科學者の、眞摯なる哲學的思索によりて、カント學說に、確乎たる新基礎が與へられたと同時に、幾多の改革が施こされた。即ち、カントの所謂純直觀なる者も、實は經驗に基づきて發達すること、隨て知識成立の根本は、先天的內的に、自己の心に於て具有せらるゝ者に非ずして、嚴正なる批評的態度によりて、先づ外界の實在(レアリテート)を確め、此實在せる外界を以て、知覺の成立、及び其の間に見らるゝ規則正しき關係の本源と見做したこと等が、其の改革の主要なる

點である。勿論、ミユルラーが發見せし、「感覺神經の特殊勢力の法則」により明かにされた樣に、各個の五官的知覺の性質は、感覺器官の性狀の如何によつて決定せらるゝ者であるが、併し、其の知覺の相互の關聯は、單に吾人の表象及び思考によつて左右せらるゝ者でなく、吾人の思考に無關係に、一定の必然的規律の存在を、外界に於て認めねばならぬ。即ち此の關聯の根本的の者たる、空間的竝存、竝びに時間的繼續の如きも、吾人の意識に於て、其の基源を求むべき者でなくして、事物其の物に之を求めねばならぬ。殊に、吾人の思考とは全く無關係に、一定の現象は、毎常他の一定の現象を喚び起し、其の現象は、更に第三の一定の現象を喚び起し、斯くて連鎖的に、因果律が極めて規律正しく行はるゝのを見れば、一層、外界に於ける實在の疑なきことを、信ぜずには居られない。隨つて、因果關係の連鎖を尋ねて、其の始に遡れば、終には、あらゆる現象の最後の原因に到達することが出來る。而して『力』と『物質』とが、夫れである。

「現象界に於けるあらゆる變化は、其の性質及び質量に於て、變化せざる『物質』の、時間及び空間に於ける運動に外ならぬとは、既にカントも謂つて居ることであるが、輓近の物理學・化學によりて、物質及び勢力不滅の法則を知り、原素・原子及び分子に關して、明瞭なる概念を與へられたる今日に於て、吾人も亦、外界に於けるあらゆる現象を、不滅不變なる物質の微小體、即ち原子及び分子が、本來其の中に具有せる、牽引と反撥との二力に左右されて、時間及び空間に於て運動するとに迄導かねばならぬ。而して、光學や音響學に於ける樣に、其の各種の現象を、之に導くことが出來れば、即ち、因果律の要求を滿足に充たし得たのである。」

由是觀之、自然科學の目的は、自然界に於けるあらゆる現象を、物質を構成せる微分子の、牽引及び反撥によつて起さるゝ、時間及び空間に於ける運動に導き、數學的に之を解析し、因果の關係を瞭然たらしむる

とにある。而かも其の際、『物質』及び『力』なる者の本性は如何、又如何にして、此等の者が、吾人の意識に作用するか、將た意識とは抑〻何なるかの問題は、未解決の儘に殘つて居る。

這般の關係を、最も巧妙に、最も明瞭に叙述して居るのは、一千八百七十二年に、デュボア、レイモン氏によつてなされたる、「自然界認識の限界」と題せる有名なる講演である。豐贍なる思想を、壯麗なる言辭によつて行ることに於て、當代第一と稱せられたるデュボア氏は、此の不朽の講演を、次の詞を以て始めて居る。

昔の世界征服者が、其の凱旋の安息日に於て、地圖を擴げて、徐ろに其の封域の境界を定め、之によつて、或は此處の民衆よりは、尙ほ調貢を徵すべく、彼處の沼澤は、流石に勇敢なる彼れの騎衆にも、打ち越す能はざる關門であることを知らんと欲する樣に、當代の世界征服者たる自然科學も亦、祝賀の機會に際して、暫らく其の研究の手を休めて、靜かに、彼が領土の眞の境界を明にすることは、決して徒勞ではない。

斯くて彼は、先師たるミュルラー、同僚たるヘルムホルツ等と同じ樣に、外界の實在を認め、而かも、吾人が、五官によつて知り得たる外界の性狀は、感覺神經の特殊勢力の法則の示す如く、主觀的の者たることを明かにし、進みて、物質及び勢力不滅の法則より立論して、外界に於けるあらゆる現象は、牽引と反撥との二力によつて、物質を構成せる微小體が、時間及び空間に於て運動することにより、惹き起さるゝ者であつて、隨て、自然科學の眞の目的は、此の見地から、自然界に於ける多種多樣なる現象を、時間及び空間に於ける、微小體の運動に導きて、統一的に之れを解釋することであると言つてゐる。

然らば即、物體を構成せる微小體とは如何なる者なるか。抑〻物體は之を細分すれば、最早、之を分つこと能はざる一定の限界に到達する者

であるか、夫れとも又、限なく細分し得る者であるか如何。若し一定の限界ありとせば、是れ即原子と稱せらるゝ者で、上述の微小體とは、此の原子を指して居るのであるか。若し又無限に細分し得らるゝ者とせば、其の極、終に實質なき者となり、單に牽引及び反撥二力の出發點と見做すべき者となり了るべきか。若し然りとせば、如何にして此の實質なき者より、實質ある者を生ずるや。何れにせよ、所謂微小體乃至原子なる者は、畢竟一の概念に過ぎずして、其の本性に關しては、全く不明である。隨て又、力とは何ぞやと云ふ問題も亦、全く解くことが出來ぬ。

物理學及び化學は敎へて曰く、「原子とは、物體の、分割し得らるべき究極の單位で、且つ一定の力を具へて居る」と、果して然らば、原子も亦、一の物質で、他の一般の物質と同じく、一定の廣袤と、凝性と、力とを具へて居なければならぬ。隨つて、縱令、物質界に於けるあらゆる現象を、單一なる原子の運動に導き得たりとするも、畢竟、是れ唯、複雜せる現象を、簡單なる者に分析し得たに過いないのであつて、之によりて、物體及び力なる者の本性を明かにせんとするは、恰も火を以て火を說き、水を以て、水を論ずるが如く、到底、其の目的を達することは出來ない。是れ即ち自然科學の駿馬も、打ち越す能はざる、第一の難關である。

更に轉じて、吾人が、天體に於ける日月星辰の運行を、數學的に測定し得た如く、各瞬時に於ける腦の原子の、位置及び運動の狀態を測り知ることを得、此の觀念には、此の原子群が、斯の如き變動を示し、彼の表象には、彼の原子群が、彼の如き配列をなすことを、見得るとするも、而かも吾人は、之れによつて、最も單簡なる心的作用の起る以所をも理解することは出來ない。其の際、吾人の知り得る所は、單に斯の如き心的作用には、斯の如き腦原子の變動を伴ふと云ふに過ぎない。是れ即ち、自然界認識の第二の難關である。

約言すれば、(一)物質及び「力」の本性。(二)意識作用の本性。是れ即ち自然

界認識の二大關門で、自然科學の領土は、之によつて限ぎられ、此の關門以外には、一歩も出づることが出來ない者である。デュボア氏は、此の範圍以外を以て、永久に測り知る能はざる領域 Apodiktisches Ignorabismus と呼んで居る。而かも此の二大難關は、要するに、「物」とは何ぞ、「心」とは何ぞと云ふ、人生の前途に横はる、最も古くして又最も新らしき問題に歸着する。何となれば、「身體」は「物」であり、「精神」は「力」であるからである。

斯くて、カントの如く、純哲學的思辨より入り來るも、將たヨハンネス、ミュルラー、ヘルムホルツ、デュボア、レイモンの如く、科學的見地より批判を行ふも、自然界の自然科學的認知には、一定の限界あることが明かとなつた。而して、其の限界によりて、「物」と「心」との領域が、截然として分かたれて居る。自然科學者は、宜しく、日夕之を忘れず、常に其の分を守り、決して領土を侵してならぬのである。併しながら、之れと同時に、自然科學者は又、物體即ち現象界に於ては、彼に取りて、何等打ち越すべからざる關門の存せざることを記憶せねばならぬ。彼は、物質界現象界の征服者として、其の領域内に於て、女王たる權威を主張すべく一の躊躇も、一の狐疑もあつてはならぬ。たとひ、夫れが無機界に於て起る者であらうとも、生物界――自分は生物界と云ふ語を、特に讀者諸君の耳に響かしたい――に於て現はるゝものであらうとも、等しく是れ、物質界に於ける現象たる以上は、自然科學の支配すべき領土である。之れを、牽引及び反撥の二力によつて、時間及び空間に於て起されたる微分子の運動に導き、原因結果の法則によりて、何處迄も、機械的に、解說すべきである。此の女王の手によつて布告されたる、同一の理法、同一の原則は、無機界にまれ、有機界にまれ、行くとして行はれざるべき道理はないのである。又何を苦んで、「生活力」の如き、神怪なる力を假り來るを要せんや。

噫、是れ大カントの哲學と、輓近自然科學との握手によつて、與へら

れたる教訓である。眞理である。哲學者も、自然科學者も、宜しく之を信條となして行動し、之を羅針盤となして其の研究を進めたならば、生命問題を論ずるに當りて、何等の矛盾も疑惑も起らない筈である。而かも動いて止まざる人間の思想は、今や再び此の信條より放れんとするに至つた。是れ抑何の故であらうか。

○ヘッケル一派の淺薄なる唯物論

十九世紀の中頃以降、自然科學と、哲學との交渉は、最も活躍を極め、哲學者にして自然科學の影響を蒙れるあり、又、已に述べたミュルラー、ヘルムホルツ、ヴント、デュボア諸氏の如く、偉大なる科學者にして、哲學に沈潛し、健實の信念に到達した人も少なくなかつたが、併し其傍ら、生物學界に一種の惡傾向を生じ、爲に、人をして、自然科學即ち物質主義なりと誤解せしむるに至らしめ、一時猖獗を極めたる淺薄なる倫理的物質主義も亦、近世自然科學に、其の責を歸する人あるに至らしめた。

此傾向に屬する人々は、日として大業績の出でざるなく、物として說明し得られざるなきかの如き、駸々乎たる生物學の盛況に眩惑し、十分なる批判なくして、守らざる可らざる境界を越え、達し得可らざる所に、强て結果を獲得せんとしたのである。即ち、彼等は、獨り、物的生活現象のみならず、あらゆる意識現象をも、純物質的條件より說明せんと試みたのである。此派の代表者としては、カール、フォーグト及びエルンスト、ヘッケルの二氏を擧げることが出來る。

千八百四十六年に、カール、フォーグト氏が公にした書物は、此種の極端なる唯物主義の主張の先驅をなせるもので、思考の腦髓に於けるは、恰も膽汁の肝臓に於けるが如く、尿の腎臓に於けるが如きものであると云つた。此の種の淺薄なる唯物思想を懷いて居たものは、此時代に於ては、頗る多かつたが、何時でも直ぐ例に引かれるのは、ヤコブ、モレショット及

びエルンスト、ヘッケルの二人者である。

ヘッケルの哲學は、彼れが專攻せる生物學、就中發生學を基礎として立てたものであつて、自ら稱して一元論（モニスムス）と云て居る。蓋し其の意は、無機有機及び精神生活の世界を通じて、總ての現象を、唯一根本原動力に歸せしめんと欲するのであつて、彼は、之れを求めて、原子中に存在する、中心力（ツエントラールクラフト）に得た。彼によれば、原子及び中心力なる者は、永久不變のものであつて、之が離合聚散に依つて、宇宙も、太陽も、地球も出來、地球上に於ては、陸と海とを分ち、或る條件の下に於ては、生命をも生ぜしむるのである。かくて、一度び出來上つた生命は、一面には順應に依り、一面には遺傳に依り、加ふるに生存競爭に依る自然陶汰ありて、次第に複雜の度を增し、原子中に內在した意識の可能性は、終に眞の精神作用に開展し得たのである。

故にヘッケルに據れば、總ての「宇宙の謎」にして、彼に解釋し得られざるもの無く、「物質」とは何ぞ、「力」とは何ぞと云ふ問題も、彼れの一元論に依れば、物質不滅則及び勢力不滅則によつて、容易く說明が附くのである。即ち「物質」及び「力」なる者は本來永久的に與へられて居る者で、原子說によつて難なく了解することが出來ると信じて居る。而して其際、彼れの立論の根柢をなせる、此の原子說は、畢竟、一つの假說に過ぎずして、デュボア、レイモンの言つた樣に、少しく詳細に研究すれば、其中に、幾多の矛盾を含んで居ることを曉らなかつたのである。

尙ほ他の一つの問題、即ち、如何にして、純物質的原因から、感覺及思想の如き精神作用が生起するかと云ふに疑問に對しては、彼は簡單に、各原子內には、或る條件の下に、感知し得る能力が內在して居るものであるが、大腦の神經細胞內に於ては、丁度、かゝる條件が充たされるものであると答へて居るのみである。而して其際、彼れの所謂原子精神なるものゝ、果して如何なるものなりや。數十億、數百億の原子精神が集

合して、如何にして、一の統一せる精神を形成し得るやと云ふが如き問題に至つては、何等說明する所がなかつたのである。

恐らくは、認識論的反省より來る攻擊をば、彼は全く了解することが出來なかつたらしい。彼は感覺を介して我等の意識に與へらるゝものは、現象としての世界であつて、眞實のものにあらざることを知らなかつた。世界に關する我等の表象に於て、何物か眞實なりや。認識す可き意識と、認識されたる物の本體との間の關係如何と云ふが如き、認識論の根本問題に對しては、彼は全く觸るゝことさへも敢てしなかつた。彼は、與へられたる現象界を、單に眞實のものであるとして、之を取扱ひ、之を按配して總ての謎を說き得たと信じてゐた。

此の淺薄なる一元哲學は、通俗の科學書ヘッケルの「宇宙の謎」、ブュヒネルの力と物質等)に依つて、社會の各階級に浸潤し、輕佻なる當時の社會は、其の倫理的物質主義を包むに、此の學術的の皮膜を以てした。

新生氣說の勃興

かゝる杜撰なる機械說に對しては、早晩反動が起らないでは止まなかつた。しかも先づ、神學者及び哲學者の仲間から反抗が起つたのは、素より當然であるが、併し彼等の多數の說く所は、彼等が愚かなる者と罵つて居る唯物論よりも、尙一層愚かなる者であつて、學問上殆ど何等の價値なきものであつた。尙此等の愚かなる反駁のみならず、ヘルムホルツやデュボア、レイモン氏等によりて建設せられたる、嚴正なる自然科學的認識論の立脚地より、眞面目なる價値ある反駁も、續々起つた。就中ロッツエ、フェヒネルの如き人々は、輓近科學と理想的哲學との調和を圖るべく、非凡の努力を捧げた。

獨り認識的哲理の上よりのみならず、生物學自己の領域に於ても亦た此の極端なる唯物論に對して反旗を揭ぐる者が、尠くなかつた。而かも、

始めは、微弱、殆ど見るに足らなかつた此反動が、最近十年間に至つて、著しく勢力を増し來り、今やヘルムホルツ、デュボア、レイモン等の努力によつて大成せる眞正なる生物學に取りて、侮るべからざる一敵國たる勢を示して來た。此の新傾向、即ち所謂新生氣説Neovitalismusと稱せらるゝ學徒は、獨り意識及び精神作用が、物質的條件より説明し得可らざることを唱ふるのみならず、生活現象の機械的説明をも、併せて放棄し、生活力なるものを、再び生物學に復活せしめんとするのである。乃ち搖いて止まざる思想の振子は、玆に復た、機械説より生氣説に一轉化を行はんとするに至つたのである。

此の新生氣説の立場を取る者は、其源を、ウィルヒョウ及びベールに求めることが出來る。先にも述べた如く、細胞病理學の創設者たるウィルヒョウ氏は、其始めに於ては、熱心なる生命機械説の論者であつたが、研究愈々進み、觀察愈々精密を加ふるに從ひ、益々人智を超絶したる生活現象の靈妙を驚歎して、終に、近代に於ける新生氣説論者の唱ふる所と、餘り異ならざる見解を持するに至つた。彼は、彼以前にも、彼以後にも無き程、生活現象の迷宮を奥深く辿り入つた。而して其の輪奐の美、其の結構の妙を知ると深きだけそれ丈、フォーグトやヘッケル一派の、大膽なる態度を、苦々しく思ふこと甚しく、力を極めて、之を排斥し、物質的獨斷主義の、神學的獨斷主義に劣らず有害なることを警告した。否、彼は、物質的獨斷主義は、科學の衣を纏ひて、其の獨斷的性質を詐るを以て、人心を茶毒すること、教會の獨斷主義よりも却て甚だしく、且危險なるものとなした。

彼は、生命の本體、及び生ある有機體が、如何にして生なき無機界より成立せしかに就いては、意識現象と同じく、何等決定的説明を與へることが出來ないと斷じた。さり乍ら彼は、無機界に存する以外の、特有なる力や元素が、生物體内にあらうとは考へなかつた。故に生物の表はす總

ての作用は、細胞を構成せる元素の機械的變動に歸せしむることが出來るけれども、唯、有機界に於ては、「力」及び「物質」が、互に相作用する仕方、及び其の運動の形式は、無機界に見る可らざる一種特有なものであつて、彼は之を假りに、古き名稱たる「生活力」を以て呼ばんとしたのである。

且つ又有機界に於て奇とすべきは、之に觸接する他物に、其の固有の運動を傳播せしむることで、斯くて生ずる、榮養・同化・成長乃至細胞の生殖・增加等の諸現象は、全く、生物獨特の性質であつて、隨て生命ある細胞の增殖は、既に存在せる細胞より出來る外に、決して他に見られない。生なき無機物から、直接に生ある有機體が新生することは、未だ嘗て知られざる所である。されば學術的經驗の達する範圍内に於ては、「生命の連續」Kontinuität des Lebens 換言すれば、「總ての細胞は細胞より生ず」Omnis Cellula e Cellula と云ふ原則が、あてはまつて居るのである。又理論上、地球上に於ては、生ある有機物は、必ず或る時期に當り、生なき無機物より、發生せしことを信ぜねばならぬが、併し、如何にして、無生的運動が、生的運動に變化したかは、全然不明である。

故にウイルヒョウによれば、生物體の研究に於て、知り得る者と、知り能はざる者とを、明瞭に區別せねばならぬ。生命運動其の者は、總ての方面に於て、科學的に研究し得るも、生命運動を惹き起す本源に至つては、あらゆる研究の到達し得ざる所である。「我等は、物質が、如何にして生物となるかを知ること能はず。唯、生物となりたる物質が、如何に運動するかを研究するを以て、滿足せざる可らず」と云つて居る。

彼の子弟にして、後繼者たりしリンドフライシュ氏も亦、科學的認識の範圍を超えて、形而上學的空想を廻らすの危險を說いた人であるが、併し、師說を承繼して、生活現象の根源は、到底測知すべからざる者となし、千八百八十八年に出た、彼の著「醫學的哲學」に於て、此の思想を鼓吹して居る。「新生氣說」てふ名稱は、實に、彼によつて始めて唱へ出された

のである。

ブオン、ベールは、既に述べた如く、胎生學の建設者として、不朽の功績ある人であるが、終生、彼の青年時代の自然哲學的生氣說の遺風を脫却する能はず、彼に依つて育て上げられた生物學が、後年、彼の豫想した所とは、如何に異なつた方向に發展したかを、經驗しなければならなかつた。十九世紀の七・八十年代に於て、物質的世界觀が、全盛を極めて居た時代に於ては、彼及びウイルヒョウの言に耳を傾くるものは、一人もなかつたのであるが、八十年代の中頃より、物質主義の到底なすなきを唱ふる聲が、次第に高くなるにつれて、此の二人の偉大なる科學者の生氣的生命觀に、隨喜する者が、頓に多くなつて來た。

物質竝びに「エネルギー」の不滅則と、進化論とから、總ての問題が解決されるだらうと思つたのは、餘りに大膽なる希望であつた。二三有機物の合成から、直に、生命人造は時の問題なりと唱へたのも、餘りに言ひ過ぎた言葉であつた。生命問題の解決は、ヘッケル一派の唯物論者の云ふ如く、しかく容易いものではなかつた。恰も山を登ること愈々高ふして、眼界が益々新らしくなる樣に、深く探るに從ひ、豫期せざりし困難は現はれ、解決の代りに、到る所、新しき疑問が湧き出でたのである。生活體の成分の中、尤複雜なる蛋白質の集成は、エミール、フィッシャー氏に依つて、着々として進行しつゝあるが、併、よし之が今日に於て十分成功したとするも、之に向つて以前の如き、大なる期待を喚び起すことは無いであらうと思はれる。ブュッチュリ氏の最近の研究に依るも、最も簡單なる細胞原形質の構造と雖も、到底、化學的分析を以て窺ひ知る可からざる底の、複雜なるものである。化學者が、現に取り扱ひ得る蛋白質は、何れも死せる蛋白質である。生命ある蛋白質の集成は、殆ど不可能である況んや、其の蛋白質を用ゐて、更に生命ある細胞に於て見らるゝが如き複雜なる構成を取らしむることは、猶、幾百層倍困難なる仕事であらね

ばならぬ。

從來、既に說明されて了つたと思はれた、多くの生活現象も、仔細に之を點檢するに從つて、益々不可解の點を增して來た。曾ては瓦斯體の壓力と、氣體吸收の原理とに依つて、說明し得可しと思はれた呼吸現象も、よく檢らべて見ると、しかく單純ではなく、酸素が肺壁から血中に入る作用は、一種特有なものであることが分つて來た。又た養素の吸收及び腺の分泌の作用は、全く滲透壓の原理に從ふと思はれて居つた所が、實は、死せる膜を單に理學的法則に從つて、液質が出入するのとは、大に有樣を異にし、腸細胞や、腺細胞の、固有の機能を必要とすることが分つて來た。其の他、筋肉・神經等に於て、活動の際に起る電氣的現象も、單に附隨現象に過ぎずして、未だ之を以て、筋肉・神經作用の本性を說明するに足らざることが分り、猶又、感覺の生理に關しては、物理的・機械的の解說によつて、尤も大なる進步をなし得たのであるけれども、併し、如何にして物質的刺戟より、精神的感覺が生起するかは、未だ全く不明であつた。

殊に又、發生及び遺傳、換言すれば、個體發生竝びに系統發生に際して現はるゝ、自働性若くは自立性の如きは、之に滿足すべき機械的說明を附することは、殆んど不可能と考へられた。一個の受精せる細胞から、一絲亂れざる極めて規律ある路を辿つて、複雜極りなき新生・成長・變形を行ふことは、實に驚くに餘あることであるが、さらに又、斯の如くにして、其の發生を了りたる個體を見るに、其の外形に於て、其の內景に於て、之を生じたる兩親及び祖先に酷く肖より、何處迄も、種の特性を保續して行くのであつて、愈〻益〻其の靈妙を感嘆せずには居られなくなつたのである。

又系統發生の領域に於て、爭論の中心となつて居るのは、生物の形質の變化すると、換言すれば、如何にして新しき種族が成生し來るかの問

題であるが、ダーキンの偉大なる業績の一半は、這般の大問題に、機械的・論理的說明を下さんとした點にある。彼は、生體に於て、變化性なる者の存在を認め、而かも其の變化たるや、ラマーク一派の唱ふる如くに、一種の調節力乃至順應力によつて惹き起さるゝ、合目的性の者ではなく、純然たる偶然的・機械的の者である。而して、斯く變化性によつて變化し來る者が、陶汰作用を受けて、其中、生存競爭に尤も適當なる者のみ生存を保ち、其の性質を子孫に遺傳し、斯くして其の源に遡れば、小數なりし原型より、外界に順應すべき完備せる形質を具ふる多數の種族が分れ出でたのであつて、是れ即ち、進化の現象であると說いて居る。即ち其の主張は、全く機械說の上に成り立つて居て、其處に何等目的を追ふて働らくべき內的の力、即ち「生活力」と稱すべき者の存在を、前提して居らぬのである。而してダーキンの此の進化論は、一時は、何人もAよりZに至る迄、悉く之を信じ、之によつて、系統發生の大問題も、刃を迎へて解くべしと思つたのであるが、併し、幾もなくして、之に對して種々不備の點を指摘する學者が出で、或はラマークの說を復活して、外界の變化に際して、生物體に現はるゝ變化は、合目的性の者であると唱へ、所謂直接順應 Direkte Anpassung を主張せんとする、新ラマルク學派も起れば、或は變化の原因として、ダーキンは、主として外界に着目したに反して、專ら生物體の內的關係に留意して、新たに突飛性變化說 Mutationslehre を建說せる、ド、フリース一派の學徒も現はれると云ふ樣な譯で、何人も、進化の事實を否定せんとする者はないが、併し此の事實を、機械的・論理的に十分說明し得べしと信ぜられた、ダーキン說に向つては、爭ふて鼎の輕重を問はんとする者が、蜂起して來た。

又「種」の生成と密接の關係を有する、生物の合目的性（クウエック、メーシツヒカイト）、及び順應性（アンパッスングスフエヒツヒカイト）に關しては、既に久しき以前から、生物と無生物とを區別する一大特徵とせられたものであるが、已述の如く、暫時の間、之に十分なる機械的說

明を與へた樣に見えたダーキンの自然陶汰論が、一度び動搖を來たすや、生物學上の議論は、再び此の問題に對して鼎沸するに至つた。而して機械的に之を說明するとは、無理であると云ふ念慮を抱かしむるに至つた。

此の大なる問題の說明に關する新らしき困難は、心的現象の不可解と相待つて、多數の生物學者をして、再び、無機界の科學的研究によつて知られたる法則以外の、或ものを望ましむるに至り、かくて、十九世紀の終りに至つて、又もや、人は、機械說を離れて、生氣說に向はんとし、茲に此の兩說の間に、烈しい爭を喚び起した。

少壯生物學者の多くは、生氣說の旗幟の下に驅せ集まつた。併しながら、カントやミュルラーによつて築き上げられたる、堅實なる認識論の上に立ちて、あらゆる現象界の說明に向つては、何處迄も、機械說によらねばならぬと云ふ十分なる信念の下に、新生氣說の風潮に對抗し、生活現象の說明に、何等神秘なる力、理體的想像（メッフィッシェ、スペクラチオン）を加ふることを許さなかつた大家も、決して尠くはなかつた。我が恩師フェルウオルン先生の如きは、其の錚々たる者である。

新生氣說と機械說との爭鬪は、殊に發生學の領域に於て激烈であつた。「種」の生成竝びに發生に際して見らるゝ、合目的性の事實を說明するには、ダーキンの陶汰說、及び之を敷衍せし學說にて十分なりや、將た機械的に說明する能はざる、科學的因果律を超絕せる、他の力を許容せざる可らざるやの問題に對して、ワイズマン氏の如きは、最も强硬に、ダーキン說を固持して、機械說の爲めに奮鬪した一人である。其の他ネゲリー、アイメル氏等も、這般の問題に於て、機械說の立場をとつた人々である。併かし、此等の人々の努力にも關はらず、其の當時の文藝に於ける神秘主義・浪漫主義の復興と同じ傾向が、生物學界にも現はれて、自然哲學的演繹的觀察法が、頻りに頭を擡げて來たのである。

念ふに、自然現象の機械的解釋に對する希望、及びダーキン說に對す

る期待は、餘りに大なるものがあつた。新しき自然科學の勝利の叫聲は、餘りに高き者があつた。そうして、一氣呵成にあらゆる謎を突破せんとして躍いた時、其の失望は、又一層深き者があつた。ダーキン説のみによりて、困難なる發生の諸問題を解釋する能はざることに、心附いた時、其の落膽は意外に烈しき者があつた。斯の如き狀態の下に於て、新生氣説は、思ふが儘に學壇を占有した。

ヘルトヴィッヒ氏は、此の新生氣説の傾向を代表する、最初の一人であつた。彼は形體學より出發して、複雜せる生活現象、就中、巧妙なる發生的事實に驚歎し、到底、物理學、化學の原則のみを以て、了解し得ざる所となし、終に、再び、一種特別なる「生活力」なる者の存在を假定したのである。殊にヴイズマンやルー等の熱心なる努力にも關らず、生物界に於ける合目的性に關する唯一の機械的説明であつたダーキン説が、破綻した時、彼れ一派の氣焔は頓に高まつた。

バーゼルのヴォルフ氏は、再生現象の新觀察の上に、其生氣説を立てた。彼は蝶螈類の眼球に於て、水晶體を全然除去する時は、元來は外胚葉から發生する水晶體が、之とは全く根源を異にする後方の色素上皮細胞から發生することを見た。彼に從へば、こは、明かに、損傷を受けた個所の空間的關係より、かくするとが、「目的に適ふ」から起るものである。ウォルフは之を「生氣的出來事」の否定す可らざる證據と認めたのである。彼は進んで、總ての組織及器官に、種々なる場合に應じて、合目的性に反應し得る作用ありとし、其關係は、恰も目的を追ふて思慮しつゝ行動する人に似たる者であるとした。斯く場合々々に應じて、自立的に適宜の行動を取ることは、合目的性反應の本性で、彼は之を「生氣的出來事」と呼んだのである。茲に於てか彼は、生活體に於て見らるゝ凡ての現象は、悉く或目的を追ひて出來た者であると云ふ、極端なる目的論に陷つた。彼は目的論を以て、因果律よりも、生活現象の説明に於て、更らに一歩を進め

た者と考へて居つた。

合目的性の反應は、必しも意識作用のみには限らない。本能的及び反射的行動の如きは、明かに無意識的の合目的的性反應である。而かもヴォルフによれば、斯の如き反應も、始め意識してなされた者が、屢繰り返さるゝに從ひ、次第に機械化(メヒャニツーレン)されて無意識的の者となり了つたのである。

バウリー氏も亦、新生氣說學徒の一人である。彼によれば、生活體の構造及び機能は、目的論を以てするに非ざれば、之を理解する能はざるは勿論である。而して既に目的に叶ふ構造及び機能ある以上は、茲に必ず意識の存在を認めねばならぬ。隨て機械的に之を說明せんとすることは、全然不合理である。下級の生物にも、己に精神ありて、意識行爲をなす證據として、彼は、單細胞生物に於ける、刺戟に對する合目的性の反應榮養及び生殖機能の巧妙なること等を擧げて居る。單細胞生物及び高等植物も、感覺器管を具へ、之によつて感覺のみならず、辨別作用の如き精神能力を表はすが、特に高等動物の組織及び細胞では、之が顯著である。彼は其の證明として、消化生理の泰斗たる、パフロフ氏によつて發見されたる事實である所の、消化腺の腺細胞が、攝取せし食物の種類の如何によつて、其の分泌液の性狀及び分量を調節することを以てした。パフロフ氏自身も、之に關して驚嘆の聲を放ち、「胃腺や膵の腺細胞は恰も怜悧なる人の樣である」と云つて居る。そこでバウリー氏によれば、あらゆる生活體に於ける目的に叶へる反應は、何れも一個體乃至組織及び細胞の精神作用に基づく者である。隨つて將來に於ける生物學は、畢竟、細胞精神學であらねばならぬと云つて居る。

ノイマイスター氏の如きも亦、殆ど同樣の見地に立つて居る。即ち單細胞生物若くは腸細胞が、食物撰擇の能力を有すること、肝臟の細胞が、血中の糖量を調節し、或は有害物を無害の形に導くこと、腎臟の細胞が、血中より不用成分のみを選びて、之を排除すること等を擧げて、一般に

生活せる細胞原形質は、原始精神を有し、之によつて、固有の機能を營み得る者で、是れ即生活現象の根源をなせる生活力なる者であり、此の生活力に次ぎて、一般物質界を支配せる物理的化學的の力が、生體を支配する者として居る。ブンゲ氏も亦、始は同樣なる考に陷つて居た。

ラインケも亦、バウリー、ヴォルフと同じくダーキン説の反對者で、目的論の觀察法を以て、因果的研究法の缺陷を滿す爲に、缺ぐ可らざるものとした一人であるが、其の生物の合目的性構造を説明せんが爲めに案出した、「系統力」と稱する者の如きは、全く、物理的思考法に一致せざる所の假想的觀念に過ぎなかつた。

其の他シュナイデル氏の「正生氣説」と自稱するものがあるけれども、かゝる經驗的事實を離れた空論は、否定する價値もないものであつて、たゞ以て、當代自然科學者の或る者が、再び自然哲學的思考法に感染せることを示すに過ぎない。されば、茲には其の詳細に入ることを避けて

最後に、新生氣説の中堅を形成せるハンス、ドゥリーシュ氏の所説を紹介して、此の項を終りたいと思ふ。

ドゥリーシュ氏は、初から、系統發生なる者を否認してかゝつて、千態萬狀極なき今日の生物を、僅少なる原型に歸し、此の單簡なる原型から、進化して出來た者と考ふるが如きは、全く一の臆説に過ぎずとして居る。即ち今日の生物各種族の差別は、太初から與へられてあつたものと信じ、隨て研究の興味を專ら個體發生に向けて居る。

彙にワイズマン及びルー氏等は、或は理論上より、或は實驗的事實より、受精せし細胞は、各部分が、夫々、將來發生すべき個體の、唯一定部分のみを形成すべき能力を具へ、隨つて、其の運命が豫め一定せる多數の部分が、相寄りて成れる一種の箱工細工の如き者であり、之によつて、個體發生に於て見らるゝ、一絲亂れざる秩序ある開展を、機械的に説明することが出來ると説ける、所謂、箱工説 Mosaiktheorie なるものは、

ドゥリーシュ氏によれば、全く間違つて居る。彼れは、其證據として、次の實驗的事實を擧けて居る。今。受精卵が分割して、二個・四個・若くは八個の細胞群となりたる際、其の分割細胞を分離すると、各個の分割細胞から、夫々完全なる仔蟲が出來て、唯、其の大さが、普通の者に比して、$\frac{1}{2}$ $\frac{1}{4}$ 乃至 $\frac{1}{8}$ に減ずる丈である。即ち一群塊をなして居れば、全身の $\frac{1}{2}$ $\frac{1}{4}$ 乃至 $\frac{1}{8}$ を造るべき運命しか有つて居ない細胞が、個々分離すると、小さいながらも、全體を造り上ぐるのである。して見ると、一定部分の細胞の運命は、決して初から一定して居るものではなく、場合に應じて、都合よく變化し得る者であらねばならぬ。換言すれば、胚種の一定部が、後來發生すべき個體の、組織及び器官の、如何なる者を造るか、即ち其の設計的意義 Prospektive Bedeutung なるものは、一に該部分と、全胚種との關係によつて定まる者である。

ドゥリーシュ氏によれば、生體に於て斯の如き開展を起すは、一面に於ては、胚種の內的關係、又一面に於ては、其の外界に對する關係が原因となりて、惹き起さるゝ、胚種細胞の、成長・增殖・轉位・分化に基くのである。而して、內的の自働的原因と、外的の誘導的原因とが、極めて緊肯なる調和を保つた結果である。

生活體の表はす合目的性に於て、彼は、二樣の別を立てた。其の一は、所謂靜的合目的性 Statische Teleologie で、其の二は、動的合目的性 Dynamische Teleologie なる者である。前者は恰も一定の構造を有せる機械が、都合よく一定の働作を營む樣に、一定の構成を具ふる組織・器官が、一定の官能を行ふことを云ひ、後者は、外界に於ける生活條件の變動に際して、生體は、旨く之に順應して行くことで、生活體の自立性 Autonomie は、茲によく顯はれて居る。

胚芽や下等動物では、體を分割したり、或は一部を切り取つたりした後に、補生によつて每に完全なる形體を恢復する。今茲に、一個の胚囊

期にある細胞群がある。之を裁斷する時は、活き延びて居る部分は、補生によつて、再び完全なる、併しながら普通の者に比して小なる胚囊（プラスナウーラ）を形成し、完備せる仔蟲に發育する。即ち胚囊期の各細胞は、全體に對する其の位置の關係より、後來發生すべき個體の、如何なる部分をも形成すべき能力を具へて居る。即ち彼の所謂、同一なる計設的能力 Prospektiv Potenz を有つて居る。斯く同一設計能力を具へつゝ、必要に應じて、如何樣なる設計的意義をも表はし得る系統を、ドゥリーシュ氏は、調和的均等能力系 Harmonisch-aequipotentielles System と呼んだ。而して、斯の如き系統をなせる生體が、事情に應じて、適當なる分化を示すことを以て、氏は、生活現象の自立性の第一の證明となし、斯の如く一部分を除き去るも、猶、依然として其の複雜極なき妙機を完全に保存するが如きは、到底、機械的見地より之を理解する能はざる者で、是れ實に生活體に特有なる靈妙なる作用であると論じた。

調和的均等能力系では、各細胞が、場合に應じて、種々一定せざる分化を行ひ得る者であるが、之に對して、其の分化が、常に一定して、丁度失はれたる部分を再生して、舊の如き完全なる個體に恢復する場合がある。是れ即ち、普通見らるゝ再生 Regeneration の現象で、ドゥリーシュ氏は、之を表はす者に、複合的均等能力系 Komplex-aequipotentielles System と唱へた。而かも、此の特殊の場合は、即ち生殖腺に於て見らるゝ現象で、各生殖細胞は、分離したる後、再び夫れより全個體を形成する能力を具有して居る。其の關係は、恰も、絶えず之を分割しても、而かも何時迄も、其の全體としての性質を保存する機械に比すべき者で、斯の如き機械は、迚ても、自然科學的に想像することの出來ない、巧妙なる者でなければならぬ。是れ、彼が生活體の自立性を唱ふる、第二の主なる理由である。

◎之を要するに、ドゥリーシュ氏によれば、生活體は、生活條件の變動に

應じて、驚くべき巧妙に、其の機能を變化し、以て新條件に順應し得る、自立的能力を具へて居る。此の動的合目的性は、到底、理學化學の說明する所に非ずして、自然科學によりて知られたる勢力以外の、他の特殊の勢力によつて惹き起さるゝ者でなければならぬ。此の生物に固有なる特殊の勢力を呼ぶに、アリストテレースの與へた名稱を襲用して、「エンテレヒエ」Entelechie なる語を以てした。

以上の叙述によりて、吾人は、新生氣說なる者の思潮が、如何なる者であるかを、了解することが出來たと信ずるのである。此の學派の所說は、人々によりて、尠なからず趣を異にしては居るが、併し、要するに、生活現象を說明すべく、自然科學的・機械的研究を以て不十分なる者とし、是れ以外に超絕せる、他の力、他の理法を喚び來らんとする點に於て、其の揆を一にし、舊生氣說と、選ぶ所はないのである。但し、新生氣說論者にありては、生活現象を知ること、一段深く且つ大なる者あるが故に、其の論據も亦、舊生氣說學派の如く、漠然たる者でなく、人をして、一見首肯せしむるに足る者があるが、併しながら、嚴正なる認識論の見地より批判すれば、其の誤謬を指摘することが出來る者で、舊生氣說に下されたる斧鉞は、等しく之を新生氣說に向つて加へ、其の根柢を粉碎することが出來るのである。

去れ矣生氣說

抑ゝ、ヘルムホルツや、デュボア・レイモンや、ダーキンによつて建設されたる、堅固なる機械說に動搖を起して、近時に至りて、新生氣說が斯くも盛んなる物與を見るに至つたのは、生物てふ物質界に於て見らるゝ、尤も複雜なる現象を、今日の自然科學の進步によりては、未だ悉く說明するに足らざること。就中、生活現象に於ける合目的性を、數學・理學・化學によつて理解することは、全く不可能なること、又、ヘッケル一派の不

謹愼なる唯物論に對する反動が、其の勃興に動機を與へたること。所謂、世紀末Fin-de-Siècleの狂風にすさみ行く人の心が、痛く神秘主義に傾きたること等、數へ立つれば、或は之が原因をなし、或は之を助長せしめた事柄は、許多あるが、其の最後の重大なる原因をなす者は、一般公衆は勿論、科學者に於ける哲學的思索の淺薄なること、就中認識論的修養の不備なることである。獨り新生氣說の勃興に就て、之を言ひ得るのみならず、生活現象の研究に關して起りたる、あらゆる疑問、あらゆる混亂、あらゆる誤謬は、皆其の禍根を玆に發して居る。源を塞いで末自から清く、名鏡暗を照らして魅魑忽ち形を匿す。吾人は玆に、認識論の大道を明かにし、堂々として、去れ矣生氣說を叫ばんと欲する者である。

最後の問題たる精神と身體

吾人は、曩に、自然界認識の限界を論じて、打ち越す能はざる二つの關門あることを見た。其の一は、物質及び力なる者の本性の不明なること、其の二は、意識即ち精神作用の本性の不明なることである。而かも、其の二の關門の中、其の一つを開くべき鎖鑰は、又他の一をも開くことが出來る。何んとなれば、精神は一の「力」で、身體は一の「物質」に外ならぬからである。「隨て自然界認識の限界は、畢竟、「物」とは何ぞ、「心」とは何ぞと云ふ、人間が有する、最も古くして且つ最も新らしき大問題に歸着することを知り得た。」然らば即ち、此の問題は、デュボア、レイモン氏の所謂Ignoramus et ignorabimus（現在知らず未來も知らざらむ）として、永しへに放棄せねばならぬかと云ふに、決して然らず。吾人は、須らく自然科學の爲す能はざる所に、哲學的思索の助を喚び來つて、之が解決を求むべきである。

抑〻精神とは何ぞ、身體とは何ぞと云ふに、之が解釋に二の大なる別がある。其の一は、身心を以て、全然別物と見做せる二元論Dualismusで、

他の一は、身心を以て同一物となす一元論 Monismus である。

二元論の誤謬

精神と身體、或は廣義に解釋すれば、精神界と物質界とは、全然別種の者であると主張する二元論は、太古以來、深く人心に浸潤し、牢乎として拔くべからざる者となつて居る。蓋し、感ずることは出來るか、未だ考ふることの出來なかつた太古の原始人類に於ては、身體の外に、何か特別なる力――精神――があつて、之が身體に宿つて、始めて身體を活かすと云ふ二元論に陷らずには居られなかつた。彼等をして、此の考に來らしめし主もなる原因は、死である。人が死すれば、其の手、其の足、あらゆる身體は、生時と同しく、依然として其處に横はつて居るが、併し、今や、之に觸れると氷の如く冷にして少しも溫がない。呼吸の氣が停んで居る。心臟の搏動が止まつて居る。茲に於てか、幼稚なる彼等の頭には、溫や、呼吸氣や、搏動等を以て、身體とは全く別物である所の精靈の力となし、之が身體に宿れば、生を起し、之が去れば、死を來たすと考へたのは、無理ならぬことである。

其の他、夢及び夢魘の如きも亦、大に此の考を助長せしめに相違ない。體は茲にありながら、心は一瞬時にして千里の山河に遊び、或は死せる故人と語り、或は目に見えぬ鬼神に苦しめられたりする。茲に於てか、心と體とは、全然別物であらねばならぬと信ぜざるを得ない。就中、夢に死者と相見ゆるが如きに至つては、形骸は夙に土に歸して見るべからざるにも關らず、魂魄は長へに止まつて居ると考ふるの外はないのである。是れ實に、一面宗教思想の胚胎である。

斯くて、白紙の如き人類の思想に、墨色鮮かに記るされたる最初の文字は、二元論であつたが、プラトーン、アリストテレース、デカルト氏

等の思索を經て、『物』と『心』との對峙は、益々明晰に指摘せられ、今や、二元論は當然のことに屬し、殆ど何人も之を疑ふ者なきに至つた。然らば即ち、二元論果して眞理なりやと云ふに、決して左樣でない。

抑〻精神とは何を意味するかと云ふに、畢竟するに、內的知覺によつて知らるゝ諸意識現象の總稱に外ならぬ。別に精神てふ實體ありて、其の機能として、感覺し、思考するのでなくして、此等心的作用を總括して、精神てふ言語によつて、之を言ひ表はすのである。而して、吾人の全經驗中、意識によりて統一されたる者を『我』と云ひ、之に對して『我』以外の者を『外界』と唱へ、『我』に於て、之を內的に言へば、即ち『精神』で、外的に觀察すれば『身體』である。隨て、身體を離れて精神なく、又精神より獨立せる身體もない。將た又、『我』と云ひ『外界』と云ふも、其の對峙たるや、決して絕對的の者でなく、全經驗の一部と他部とを成せる者で、隨て『我』と『外界』とは、統えず材料を交換して、互に消長しつゝある者である。即ち『我』と云ひ、『外界』と云ひ、『精神』と云ひ、『身體』と云ふも　性質上、決して根本的の差別ある者ではなくして、唯一物を、二方面より觀察した結果に過ぎないのである。眞正に存在して居る者は、全經驗をなさしむべき唯一物であらねばならぬ。而して此の正當なる論理的結論は、二元論と全く背馳して居る。

又二元論によつて說明に苦しむ點は、許多あるが、就中、身體と精神との間に於ける爭ふべからざる密接なる相關の事實は、如何にしても二元論によりては理解することが出來ぬ。二元論者の言ふ如く、精神と身體とは、全然別種の者であつて、前者は、統一せる非物質的のもの、後者は、雜駁なる物質的のものであるとしたならば、如何にして全く本性を異にせる此の兩者の間に、互に密接なる影響を及ぼし得るであらうか、又非物質的·不變的なる精神が、如何なる方法によりて物質的·變化的の身體と合一し得るか、又子供の精神は、何時如何にして、父母の精神を繼

承するか、即ち如何にして、各個の統一的精神が相分かるゝか、而して又夫れが相集りて、第三の新らしき統一的精神を新成するか、凡て此等の問題は、悉く皆二元論によりては了解することが出來ぬ。

斯く論理的に考慮を廻らすと、心身別種の者と主張する二元論は、斷じて正當なる者となすことは出來ぬ。太古人類の原始的頭腦に湧き出でし、此の幼稚なる思想が、今に至る迄、猶人心の奥底に、其の根抵を深うする所以の者は、畢竟、精神作用と身體作用とは、一見全く別物にして、無關係に行はるゝ如く考へらるゝこと、竝びに、古往今來、宗教及び道德に於て、精神に重を置き、之を以て身體を主宰する實體なりと敎ふること等が、其の原因をなして居るのである。

斯く、二元論が誤であること明白なる以上は、吾人は、一元論の立場から、心身問題の解決を期せねばならぬ。

唯物的一元論の誤謬

心身一元論に於て、二大別を設けねばならぬ。其の一は唯物論で、其の二は心身無差別說である。唯物論に在りては、眞の實在を有する者は、唯だ物質のみで、其の機械的作用によりて、あらゆる現象、即ち精神作用の成立をも說明せんとするのである。乃ち希臘の「アトム」論者以來、或は精神を以て「アトム」の振動に歸し、或は近代唯物論者の如く、意識が腦に於て生ずるは、恰かも胆汁が肝臟に於て分泌せらるゝが如しと說く等、凡て物質界に於けると等しく、純機械的に、精神作用を說明せんとするのである。

斯の如き唯物論の謬れること、は、既に述べた、デュボア、レイモンの所論によりて明かである。元來、唯物論者は、身體と精神との間に、互に密接なる相關を有し、身體に於ける一定の變化は、必ず精神に於ける一定

の變動を伴ひ、就中、腦に於ける一定の障碍は、必ず一定の精神疾患を惹き起すこと、而して又、一定の精神作用は、必ず一定の生理作用に顯著なる影響を及ぼすことを以て、自說を主張する唯一の根據として居るが、是が抑々過つて居る。勿論甲なる生理作用は、必ず乙なる精神作用に密接の關係を有することは、疑なき事實である。併しながら、之を以て、直ちに唯物論者の唱ふる如く、甲が乙の原因なりとするのは、餘りに早計である。獨斷的である。何となれば、吾人は、其の際、甲が乙の原因なりと主張すると同じ權利を以て、乙が甲の原因たることを主張することも出來れば、或は又、甲と乙とが、毎に相伴ひて起るは、此の兩者の間に、直接因果的關係があるのではなく、此の兩者に共通なる原因たるべき、第三者丙なる者があるが爲と考ふることが出來るからである。即ち丙を一方面より觀察すれば、甲となり。他方面より考究すれば、乙となりて、現はれ來る者であるかも知れない。

次にカバニス、フォーグトの如く、精神を一種の分泌物に外ならずと見做すは、餘りに極端なる論法である。何んとなれば、既にデカルトが明瞭に指摘した樣に、精神なる者は、物質とは全く其の性を異にし、廣袤なく、運動なく、重量なく、又た礙性なく、超五官的非物質的の者であるからである。

又精神を以て、一種の複雜なる運動となす說も、斷じて容認することは出來ぬ。思考は勿論、最も單簡なる感覺を取りて之を考ふるに、物理的運動現象とは、全然其の本性を異にし、到底、之を以て彼を說明することは出來ぬ。運動とは、畢竟、時間及び空間に於ける物質の位置の變化に外ならぬのである。

或は又、精神作用を以て、一種の「エネルギー」と見做し物理學者が、「エネルギー」によりて、物質界に於ける諸現象を說明する如く、精神作用を機械的に說明せんとし、所謂精神「エネルギー」Psychische Energie なる學說

が、有力なる學者の間に起つた。彼の現代化學の泰斗たる、オストワルド氏の、「エネルギー」的世界觀 Energet'sche Weltanschauung なる者は、夫である。併し、批判的認識論の見地より之を吟味すると、其の說く所は大に過つて居る。元來、精神「エネルギー」なる者、乃至之に類似せる種々なる勢力は、自然哲學の空想的產物である。然るに、之を嚴正なる自然科學の門戶に導き入れる爲に、オストワルド氏は、神經「エネルギー」なる媒介者を編み出しだ。氏の語を引用して之を叙ぶれば、

凡て物質は、種々なる「エネルギー」の結合によりて、吾人に認識せられる。其の「エネルギー」は、必ずしも、凡てがよく知られて居るもの計りではない。そう考へると、精神と物質との八釜しき對峙も、自から消失せしめることが出來る（中略）。精神作用と、機械的作用との間に見らるゝ異同は、例へば、電氣と、化學作用との間に見らるゝ異同に等しい（中略）。故に吾人は、茲に、神經「エネルギー」なる者の存在を認めやうと思ふ。而して、夫れが他の「エネルギー」とは、全く別種の形式を有するや、將た既知の「エネルギー」の特殊の結合によりて成るやは、暫らく論外に措きて、兎に角、此の「エネルギー」は、身體に於て、種々なる作用を營み、就中、神經中樞たる、腦及び脊髓に於て、更に一定の變形を受けて、中樞の機能を喚び起す者である。生理學者は、疑もなく、精神作用に際して、「エネルギー」消費と認むべき事項を、中樞器官に於て證明する。其の際、之に關與せる「エネルギー」は、如何なる性質の者であるかは、全く不明であるが、一般に、之を精神「エネルギー」と呼ぶことが出來る（中略）。而して此の精神「エネルギー」の、最後の根源たるべき者は、化學的「エネルギー」である（中略）。斯くて機械的物質的世界觀によりては、機械的現象と、精神的現象との間に、打ち越す能はざる深い溝渠が横はるが、之に反して、「エネルギー」的世界觀を以てする時は、單簡なる機械的「エネルギー」と、複雜極りなき精神「エネルギー」との間に、

絶えず關聯が保たるゝのであつて、精神界及び物質界を、一貫せる理法で說明することが出來る。

オストワルド氏の「エネルギー」萬能說も、玆に至つては、餘りに牽强附會である。抑〻「エネルギー」なる語は、何を意味するものなりや。オストワルド氏の所論を批判するには、先づ「エネルギー」なる者の定義を明かにする必要がある。元來『力』Kraftなる者は、一の性質的概念Qualitativer Begriffである。隨て種々なる力が、各個獨立の存在を保つことが出來る。即ち機械力(壓力・衝突力・引力)、分子力(凝集力・瓦斯壓力・滲透壓・熱)、原子力(化學的親和力)、「エーテル」力(電氣・光・輻射力)等の、各種の力を區別する。而して、此等の諸力は、直接之を比較することを許さぬ。又此等の諸力は、其の間に、種々なる交渉を有するにも關らず、統一的の關聯を具へて居ない。此の故に、あらゆる現象を、物質の運動に導きて、普汎的法則の下に之を解析說明せんとする自然科學に於ては、『力』なる概念丈けでは、未だ滿足が出來ない。何となれば、『力』なる概念は、性質的の者であり、隨つて、其の間に、直接、數量的比較を行ふことが出來ぬからである。而して此の缺陷を滿さんが爲に起つたものが、即ち「エネルギー」なる概念である。斯くて「エネルギー」なる者は、其の成立の本義から論じて、諸力の關係を明かにし、之か數量的比較を容易ならしめる爲に設けられたる、一の數量的・計算的概念であつて、何等理體的(メタフィジスエ、マドイツング)意義を有つて居る者ではない。

「エネルギー」なる言語は、アリストテレースによりて、早く既に使用せられたが、併しながら、今日の意味に於て、之が使用せらるゝ樣になつたのは、漸く十九世紀に入つてからである。色彩感覺の說明や、埃及形象文字の研究で有名なる、ソーマス、ヨング氏が、運動しつゝある物質の勢力を、「エネルギー」と喚んだのは、一八〇七年であつたが、ロベルト、マイヤー(一八四二年)、ジュール(一八四三年)、ヘルムホルツ(一八四七年)の諸氏の研究によつて、始めて此の語が、重大なる意義を有する樣になつた。

即ち此等の偉人の偉大なる研究によりて、始めは、一定量の熱が、一定量の仕事に變はり、又反對に、一定量の仕事が、一定量の熱に變ずることが明かになり、續いて、獨り熱のみならず、其の他の諸力に於ても亦、同樣の關係が見附かつた。斯の如くにして、あらゆる力は、機械的仕事を成すと云ふ通有性に於て、相互の間に、數量的比較を行ひ得る樣になり、又統一的に、相互の關係を理解し得る樣になつた。而して、此の機械的仕事即ち機械的運動を爲し得る通有性に向つて、「エネルギー」なる總括的名稱が與へられたのである。而かも其の中に、必ず數量的意義が包含されて居ることを忘れてはならぬ。斯く「エネルギー」なる概念は、其始は機械的運動と、他の力との間の關係から起つた者であるが、併し、あらゆる力は、要するに運動に導き得るのであるから、今日に於ては、是が定義として、「エネルギー」とは、あらゆる力、即ちあらゆる運動の量價 Bewegungswert に對する、統一的の表語に外ならぬ者であると云ふに至つた。而かも其の際、運動型式 Bewegungsform の如何は、少しも顧慮する所がないのである。

猶又、「エネルギー」なる概念に就て重要なることは、獨り、現に仕事を爲す能力のみならず、仕事を爲し得る能力をも、之に數へることである。茲に於てか、運動・熱・電氣・光等の、「エネルギー」種類 Energiearten の區別と共に、現勢力 Kinetische Energie と、潛勢力 Potentielle Energie なる、「エネルギー」型式 Energieformen の區別が立てられ、斯くて、或る種類の「エネルギー」が、他の種類に變化し、或は、或る型式の「エネルギー」が、他の型式に移り行く Energieumwandlung に際しては、「毎に其の等價 Aequivalent を示すもので、隨て其の量的關係に於て、毫も損益する所なきこと、是れ即ち勢力不滅の大法則である。」

扨て、上述の如く、「エネルギー」なる者の意義を明かにして、オストワルド氏の「エネルギー」的精神觀を批判すると、一見、其の間に、如何に大

なる誤謬が横はつて居るかを明かにすることが出來る。オストワルド氏が、種々なる「エネルギー」の結合即ち物質となし、全然其の性質を異にせる精神作用と、機械的・物質的作用とを、同一視し、此の兩者間の異同は恰も電氣と化學的作用との間に於ける異同に等しと見做したのは、其の言ふ所は等しからざるも、其の無批評的態度に至つては、正さにフォイグトやモレショット氏等の淺薄なる機械説と、何等選ぶ所はない。オストワルド氏は、化學的「エネルギー」より、神經「エネルギー」なる者を導き、之が更に一轉化して、精神「エネルギー」と成る者と想定して、物質的「エネルギー」より、非物質的「エネルギー」(?)たる精神作用に移り行く經路を、なだらかにせんと試みて居るが、併しながら、斯の如く、物質的のものより、非物質的の者を導かんとするは、許すべからざる轉化である。

殊に又、「エネルギー」なる概念は、元來、性質的意義を有する者でなくして、數量的意義を有する者で、此の點に於て、「力」と大に趣を異にして居る。即ち「力」に於ける種々なる性質を超越して、其の上に立ちて、之を統一し、其の間に、直接、數量的比較を爲さしむべく、設けられたる者である。而して、其の數量的關係は、機械的仕事、換言すれば、運動すべき質量と、運動速度とに依て現はさるゝ者であり、且つ又、「エネルギー」不滅則に從ふべき者である。蓋し、「エネルギー」に種類を區別するのは、「エネルギー」其の者に、性質上の差別あることを意味するのではなくして、單に此の「エネルギー」なる數量的價値が、如何なる種類の出來事に其の根源を有するかを示すに過ぎない。恰も、重量なる一定の數量的關係に於て、其の根源を明かにする爲に、之に語を附加して、原子重・分子重・乃至比重等の區別を立てると同一でなる。

斯く「エネルギー」の本領は、其の數量的關係であるが、オストワルド氏の、所謂、神經「エネルギー」乃至精神「エネルギー」なる者が、果して此の點に於て、「エネルギー」たる資格を保ち得るであらうか。若し此等の假想的

「エネルギー」なる者が、眞正なる「エネルギー」であるならば、啻に此等の非物質的「エネルギー」と、物質的「エネルギー」との間に、直接の轉化が行はるゝのみならず、其の轉化に際して、上述の如き數量的關係が、嚴格に當て篏ぎらなければならぬ。此の事が立派に證明されざる以上は、精神「エネルギー」なる概念は、斷じて許すべからざる者であり、隨て又、心身「エネルギー」の轉化 Psychophysische Energieumwandlung なる所論は、單に一の理體的空想に外ならぬ。

由是觀之、物質を基礎として論ずるも、「エネルギー」萬能說を武器として斬り入るも、唯物的一元論は、所詮失敗の外はないのである。斯く心身の關係を論ずるに當りては、二元論は何等爲す所なく、一元論中、唯物論も亦誤謬であるならば、之が解決を期すべき者は、一元論中の心身無差說 Identitätslehre の外はない。

心身無差別說の論據

「無差別說によれば、身體と精神、即ち「物」と「心」とは、同一不二なる一本體の二方面に外ならぬ者である。隨て、精神と云ひ、物質と云ふも、決して二つの眞に獨立の實在を有せる者でなくして、唯一の本體が、二樣の「性」(アットリブート)を取りて表はれしか、若くは、之に二樣の觀察を施した者である。即ち精神とは、唯一本體の意識に關せる一方面を云ひ、身體とは、物質に關せる一方面を指すのである。

等しく無差別說であつても、其の論據の如何に據て、三派に分かれて居る。(一)心身の間に密接なる相關を示すは、必ず一本體があつて、此の本體は、一方面には、精神となりて現はれ、他方面には、身體となりて現はれる。即ち精神と身體とは、唯一なる本體の二樣の「性」に外ならずとなす者、(二)外的感覺によりて知り得る現象界は、「物自體」にあらず。之れ

と同じく、內的知覺によりて知らるゝ心的內容も亦、本體にあらずして、一の現象界に過ぎず。而して、心的作用の本體は、物質界に於ける「物自體」に一致する。隨つて物質界の根源たる「物自體」は、即ち又精神界の根源であると主張する者。(三)物質界に於ける「物自體」なる者は、畢竟、內省によつて知らるゝ心的作用、即ち「我」なる者と同一不二である。隨つて第三說に在りては、精神作用を以て外界現象界の根源と見做し、精神作用即ち「物自體」なりとして、精神に重を置く點に於て、第二說が、寧ろ、「物自體」に重を置き、心的作用も亦、「物自體」の一現象に過ぎずと主張するのと、尠なからず趣を異にして居る。

以上三樣の無差別說中、第一の論據に立てる者は、スピノッアの說であつて、一見、一元論の如く見ゆるが、併し二元論と相距ること遠からずして、隨つて二元論に附隨せる弱點を、全く擺脫することが出來ない。何んとなれば、此の說によれば、吾人に認識せらるゝ者は、唯一本體の二樣の性として實在せる者、即ち物質及び精神であつて、本體なる者は、永久に知ることが出來ない。隨つて又、如何なる關係に於て、此の二樣の性が本體に結び附くか、將た又、心物の相互の關聯は、如何なる者なるかの重要なる問題は、二元論に於けると同樣に、依然として、未解の儘に殘されて居るからである。

斯く精神と物質とを以て、同等の實在を有てる、唯一本體の二樣の「性」と見做すことは、不合理である以上は、吾人は、此兩者を以て、等しき實在を有てる者に非ずして、寧ろ現象的の者となし、同一不二なる者が、夫れを觀察し、認識する方法 Auffassungsweise と、立場 Gesichtspunkt との如何によりて、異なりて現はるゝ者と考へなければならぬ。然らば即ち、其同一不二なる者とは、何であるかと云ふに、第二の學說に在りては、「物自體」なる者に重を置き、心的作用も亦、「物自體」の一現象であると唱へて之れよりして精神現象を導かんとするに反して、第三の學說にあつては、

心的作用を以て主となし、物質界に於けるあらゆる現象を、之に歸着せしめんとするのである。

然らば即ち、此の二說の中、何を正當となすべきか、其の先決問題として考ふべきは、第二說の唱ふるが如く、心的現象も亦、一の現象たるや否やの問題である。而して、此の問題に關して、尤も明瞭なる解答を與ふる者は、Cogito ergo sum（我考ふ故に我在り）てふデカルトの標語である。苟も現象と云ふからには、此の現象を起さしむべき或る者が存在せねばならぬ。而かも、現象を起す究極の原因たるべき者自個は、決して現象若くは影像でないのは勿論である。然らば、其の究極の原因たるべき者は何であるかと云ふに、精神・意識乃至「我」と唱ふる者でなくてはならぬ。斯く考慮を進め來ると、吾人は、必ずや、心的作用も亦、一の現象に外ならずとする第二說を捨てゝ、第三說に歸依せなくてはならぬ。

由是觀之、眞に實在せる者は唯一である。之を精神と云ひ、意識と之ひ、將た「我」と云ふも、そは單に名目上の相違に過ぎない。要するに、其の唯一なる者を、內的感覺によりて、主觀的に認識せる者、是れ即ち「心」であつて、外的觀覺即ち五官によりて、客觀的に認識する時は、是れ即ち「物」である。而かも其際、一本體があつて、夫れが、一面には精神、一面には身體なる二樣の「性」として現はれ來るのではなくして、實在する者は即ち精神である。思考すべき者である。而して其の精神が、主觀的に自個を認識する時、是れ即ち意識であつて、五官によりて客觀化されたる者、是れ即ち物質である。

斯く、精神と云ひ、物質と云ふも、實は同一不二なる者を、異なれる立場から觀察したに過ぎないにも關はらず、通常主格（スブエクト）即ち精神に對峙して、之れと全く獨立せる、目的格（オブエクト）即ち物質なる者の存在せるが如く感ぜらるゝ所以は、畢竟、物質界を形成するに際して、精神界が、如何に之に關與するかに十分留意しない所から、物質界の諸現象が、吾人の思考

とは、全く無關係に行はれつゝあるかの如く見ゆるからである。

「抑〻、心的作用とは如何と云ふに、數多の感覺及び表象が、「我」の意識によりて統一された者に外ならぬ。翻りて、物質とは何なるかと云ふに、是れ亦、一定の感覺及び表象が、統一的結合を保てる者に外ならぬ。茲に一朶の薔薇の花ありとせんに、其の薔薇たることを知り得るのは、美はしき色澤である。複郁たる香氣である。一定の形狀である。然らば卽ち、色澤とは何ぞ、一の感覺である。香氣とは何ぞ、是亦一の感覺である。形狀とは何ぞ、空間に關する一の表象である。即ち一定の感覺及び表象の統一的結合によつて、薔薇の花てふ物質が形成されて居る。其の色澤を除き、其の香氣を除き、其の形狀を除かんか、薔薇なる者、將た何處にかある。されば「ショッペンハウアー」の言の如く、世界は一の表象である。

斯く論歩を進め來ると、「心」と云ひ、「物」と云ひ、「精神」と云ひ、「身體」と云ふも、皆同一不二の者で、感覺及び表象の多數が、統一的に結合された者に外ならぬ。然り而して、此の同一不二なる者が、如斯き對峙を起す所以は、「我」なる者が、其の根源をなすのである。「我」とは何んぞと云ふに、已述の如く、精神が、直接自個を認識せる者で、統一せられたる感覺・表象進みては、之れを基礎として行はるゝ、複雜なる心的作用の結合である。而かも其結合たるや、極めて親密で、一見、殆んど不易に感ぜらるゝことが、其の特色である。而して、已に「我」あり。茲に於てか始めて「外界」あり。內的感覺に基ける、非物質的非空間的觀察によつて、「我」を感知せる者、是れ卽ち「精神」であり、之に對して、外的感覺に基ける、空間的・物質的觀察を、外界に施せる者、是れ卽ち物質である。而して、非物質的・非空間的觀察にありては、感覺・概念・思考・判斷・意欲等の、相互の關係及び活躍となりて現はれ、物質的・空間的觀察にありては、物質・力・エネルギー等の、時間及び空間に於ける變遷交涉として之を論ずるのである。即ち、

唯一本體に、二樣の解釋法 Zweierlei Auffassungsweise 或は二樣の概念系統 Zweierlei Begriffssysteme を施こすことによりて、「精神界」と「物質界」との對峙を起すのである。今這般の關係を、最も明瞭に發表せる、ベルトルド・ケルン氏の次の語を引用して、吾人の主張を一層確實ならしめやうと思ふ。

Das Endergebnis ist, dass die psychische und die physische Reihe ihrem Inhalt nach als identisch anzusehen sind. Verschieden ist nur die Form, in der wir die reale Wirklichkeit zur gedankenmässigen Auffassung und zum sie darstellenden Ausdruck bringen, verschieden ist nur das Begriffssystem, welches wir zu diesem Zweck anwenden, einmal das räumlich-materielle, das andere Mal das raumlos-seelische. Seele und Leib sind in gleicher Weise identisch, ihre Substanz ist ein und dieselbe, einmal als immaterielle, das andere Mal als materielle Substanz gedacht. Sie wirken nicht aufeinander ein, sondern zeigen immer dasselbe Verhalten auf Grund der Identität d erseelisch-geistigen mit den körperlichen Vorgängen.

Berthold Kern.

斯くて論理的思索によつて、吾人は、今や、最も純正なる一元論たる、精神的無差別說 Spiritualistische Identitätslehre に到達することを得た。而して、此の見地に立ちに達觀すれば、「物」と「心」てふ千古の大問題を包める迷霧は、今や全く霽れ渡りて、又一點吾人の眼界を遮るべき物はない。「神」と「自然」「精神界」と「物質界」、「我」と「外界」なる絶對の二元的對峙は、忽焉として消え失せて、其處に人智の到底追究し能はざる「物自體」もなければ、水に映れる月影の如き空しき「現象界」もない。大宇宙は悉く其門戸を開放して、喜んで吾等を迎へ、些の秘密も狐疑もなく、あらゆる者を吾等に示すのである。但し吾等も亦た、其の際、獨斷の覆面を脫ぎ、偏見の目隱しを去り、吾人の論理的思考に、十二分の信賴を置きて前進せねばならぬ。

而かも其の進み行くに當りて、二の大なる道がある。其の一を選へば、非物質的・非空間的概念を以て働くのであつて、是れ即ち哲學の本領であり、他の一を辿れば、物質的・空間的觀察を行ふのであつて、是れ即ち自

然科學の任務である。而かも全き楯を知らんと欲する者は、須らく其の兩面を見ることを忘つてはならぬと同樣に、哲學と自然科學とは、相依り、相扶けて、始めて宇宙の圓滿具足せる認識を望むことが出來るのである。哲學と自然科學とは、決して反目嫉視すべき敵でなくして、唇齒相輔くるの兄弟でなくてはならぬ。

以上の叙述によりて、吾人は、身體と精神との性質上の關係を明にすることを得た。然らば即ち、此の兩者間の作用上の關係は如何と云ふに、之に關しては、二の場合を考へることが出來る。一は即ち心身相互作用說 Psychophysische Wechselwirkung であり、他は、心身竝行說 Psychophysische Parallelismus である。其の中何れか正當であるか、暫く其の說く所を聽いて、之れが批判を試みたいと思ふ。

心身相互作用說と心身竝行說

心身相互作用說に在りては、心身相互の間に、密接なる關係を有てるは、全く此の兩者間に、因果的關係を有し、一定の精神作用は、直接身體に影響を及ぼして、一定の物質的生理的作用を惹き起すべき源因となり、之に反して、身體中に於ける一定の生理作用が、一定の精神作用の、直接の源因を爲す者と說くのである。之に反して、心身竝行說に於ては、心身相互作用の出來得べからざることを述べて之を否定し、之に代はりて、精神作用と身體作用とが、密接の關係を表はすは、此の兩者が、相竝らびて行はるゝが故であると主張するのである。

心身相互作用說を信ずる人は、多くは、二元論者であつて、精神及び身體なる二つの實體が存在し、夫れが、作用上、互に影響を及ぼす者と思つて居る。然らざれば、唯物論者で、心も亦一種の物質若くは「エネルギー」と見做し、心身互に直接の交渉を保つて居ると說いて居る。之に反して、心身竝行說を奉ずる人は、一元論者の中、心身無差別說を信ずる

者で、心身を以て二の實體と見做さず、單に同一不二なる一實體に二樣の觀察、二樣の概念系統を適用した結果に外ならずとするのである。隨つて、例へば楯の兩面に描かれたる模樣が、毫も其の間に因果關係を有することなく、各〻獨立せる者でありながら、猶ほ表の模樣の一定部は、裏の模樣の一定部に匹敵しつゝあると同樣に、「心」と「身」とは、各獨立せる系統を組織しつゝも、猶ほ相互の間に密接の關係が有されて居ると主張するのである。

心身竝行論者が、心身相互作用說を駁擊する主なる理由は、(一)精神作用と身體作用との不等 Heterogenität des Psychischen und des Physischen (二)自然界に於ける完結せる因果律 Das Prinzip der geschlossenen Naturkausalität (三)エネルギー不滅則 Das Prinzip der Erhaltung der Energie なる三つである。抑〻「物」と「心」とを取りて、之を比較するに、全然不等にして其の性狀を異にし、廣袤なく、運動なく、重量なく、礙性なく、超五官的非物質的の精神と、廣袤あり、運動あり、重量あり、礙性ある物質との間に、直接、因果關係を有ち、甲より乙を生じ、或は乙より甲を喚び起すことは、如何にしても考ふべからざることであるが、夫れにも關らず、心身相互作用說を主張する者は、此の反駁より免かれんが爲に、物質を以て、「物自體」なる者の幻影(シャイン)となし、此の「物自體」と、精神とが、直接交互に作用する者と言つて居る。併し斯くする時は、「物自體」なる者に關して、新たなる疑問が續出する。又假りに「物自體」なる者の存在、竝びに、之れと精神作用との相互作用を承認するも、直接、精神と相互に影響する者は、「物自體」であつて、決して物質即ち身體ではない。又、物質界を以て、單に一の現象界と見做さんか、已に現象と云ふ以上は、現象として感知する或るもの、即ち精神あつて、始めて物質界が形成せらるゝのである。隨て精神界が物質界に影響することは、考へられざるに非ざるも、反對に、物質界より精神界を左右することは、不可能でなければならぬ。斯く考へ來ると、

精神界と物質界との不等なることを承認しつゝ、而かも此兩者の間に密接なる關係を保つことを說明し得る者は、心身竝行說の外はない。

次に、因果の關係は、常に完結せる者であつて、因果の連鎖を辿れば、物質的現象は、全然物質的に說明せらるべき者である。換言すれば、一定の物質的事項は、常に他の物質的原因によつて導かれ、又、他の物質的事項を惹き起し、斯くて物質界に於けるあらゆる現象は、物質的因果の連鎖によつて、殘りなく說明し了せらるべき者で、隨つて、此の連鎖が、精神作用なる、別種の因子（ファクトル）によつて、中斷せらるゝことを許さない。之れと同じく、精神界に於けるあらゆる現象は、單に心的作用の連鎖が、因果的關係を有ちて成れる者で、物質的作用が、直接之に關與し、其連鎖中に介入すべき者でない。

心身相互作用說を信ずる人の中には、完結せる因果律を以て、一の獨斷說となし、物質界には適用すべきも、精神界は、敢て之を以て束縛すべき者でないと唱ふる者もあるが、併し、是は大なる誤である。已に述べし如く、精神と云ひ、物質と云ふも、畢竟、唯一本體に對する、二樣の觀察、若くは二樣の概念系統を與へて、之を解釋せんとしたものに外ならぬ。隨つて、若し、因果の定律を無視せんか、獨り物質界のことのみならず、精神界に於ける現象に向つても亦、到底、一貫せる思考を進めることは出來ぬ。而かも、斯く同一不二なる者を、異なれる著眼點より觀察し、二樣の概念系統を施こして、一を物質界、他を精神界となせし以上は、一は、終始物質的・空間的・器械的說明を用ひて、因果の關係を明かにすべく、是れ即ち自然科學の任務であり、他は、一貫して、非物質的・非空間的・非機械的說明に基づきて、其の解釋を求むべく、是れ即ち哲學の本領である。而かも其の際、尤も注意を拂はざるべからざることは、此の完結せる兩因果律を混亂せぬことである。無機界に於ける自然現象にせよ、有機體に見らるゝ生活現象にせよ、苟も物質界のことを論

ずる以上は、何處迄も、物質「エネルギー」力運動等の概念により、自然科學的機械的說明を用うべく、決して、時に或は物質的因果律により、時に或は精神的因果律を喚び來りて、物質的因果の連鎖の間に介み、完結せる因果律を中斷することがあつてはならぬ。夫の千里眼を說き、念射を信じ、死後生活を語る靈魂論者 Spiritualisten や、生活現象を說明すべく、生氣 Vita Anima を喚び、「エンテレヒヤ」を假り來る生氣說學徒の病根は、一に皆玆に胚胎して居る。又是れと同じく、精神界のことを解釋するに當りては、空間的物質的機械的概念を廢して、感覺し、思考し、意欲する所の、非空間的非物質的「我」を中心として論ぜねばならぬ。自然科學によりて、直接、精神界を說明せんとする唯物論者、及び心身相互作用說を主張する二元論者は、何れも皆、物質的因果律と、精神的因果律とを混亂して居る者である。其の過や、火を見るよりも瞭かである。斯の如くにして、吾人は、生氣說の病根を指摘し、よく之を一掃し得ると同時に、輕佻淺薄なる唯物論者の、敗北すべき理由をも悟り得るのである。

更に又、轉じて、「エオルギー」不滅則の理法より論するも、心身相互作用說は、到底、誤謬たるを免れない。元來「エネルギー」不滅則は、二の定律を含んで居る。一は等價律 Aequivalenzprinzip で、他は不易律 Konstanzprinzip である。前者は、一の「エネルギー」が、他の「エネルギー」に變遷するに際しては、毎に等しき價を保ち、其の間、何等損益する所なきことを示す者であり、後者は、等價律の結論として導かるゝ者で、自然界に於ける「エネルギー」の總量は、毫も增減することなく、恒に一定不易なることを言ひ表はせる者である。

今、心身相互作用說を取りて、之を批判するに、「エネルギー」不滅則と枘鑿相容れざる者である。何んとなれば、物質界に於ける出來事を考ふるに、一の「エネルギー」は、嚴格に、夫れと等價を有する他の「エネルギー」に移り行き、隨つて、物質界に於ける「エネルギー」の絕對的總量は、終始、

一定不易の者であるから、物質界に於ける出來事に、直接精神作用が加入すべき餘地はない。若し心身相互の間に、直接の交渉加入ある者とせば、物質界「エネルギー」の絶對的總量は、時に或は增加し、時に或は減少すべきである。又同じ理由によつて、超自然科學的の神秘なる力が、生活現象に關與すと主張する生氣說も亦、明かに大なる誤謬たることが分かる。

心身相互作用說を辯護せんとする人は、「エネルギー」不滅則を以て、一の獨斷說となして、此の難關を逃れんとする者もあるが、而かも物質界に於て、「無」は「有」を生せず。「有」は又「無」とならざることが眞理である以上は、「エネルギー」不滅則の獨斷的臆說でなくして、確かに一の眞理たるは言ふ迄もない。

玆に於てか、精神作用を以て、又、一種の「エネルギー」と見做し、之によつて、心身相互作用說と、「エネルギー」不滅則との間に於ける衝突を調和せんと試むる者もあるが、其の不合理なることは、既にオストワルド氏の「エネルギー」萬能說を批判せし條下に於て、述べて置いたから、玆に之を繰り返す必要はない。

由是觀之、心身相互作用說の如く、完結せる因果律を無視し、「エネルギー」不滅則に牴觸し、物質界を說くに當りて、精神界を之に混入し、或は精神界を論ずるに際して、直接物質界の影響を認むることは、大なる誤であつて、生物界にまれ、無生物界にまれ、苟も物質作用たる以上は終始物質作用と因果的關聯を保ち、隨つて、物質的・機械的、換言すれば、理學・化學の一般法則を用ゐて之を解釋し、又、精神作用は、常に精神作用と、直接に影響し交涉する者で、隨つて、理體的・精神的に之を說明し、其の間に劃然たる境界を立てゝ、其の混亂を防がねばならぬ。而して是れ實に形而下學と形而上學、換言すれば、自然科學と哲學との守るべき領域を示すべき、眞の境界線であらねばならぬ。而かも其の區劃たるや、

一本體に、二樣の觀察乃至二樣の概念を施こすことによつて起つた者に過ぎないのであつて、眞に存在する者は精神界であり、物質界なる者は、精神界を客觀化せし者に外ならんのであるから、物質界に於ける諸現象の究極の原因は、之を精神界に求めなければならぬ。

例せば、茲に或る刺戟ありて、爲に一定の運動を惹き起したりとせんに、吾人は、完結せる因果律の示す所に從ひ、客觀的物質的に、何處からWoher此の運動が起つたかを記載し說明せんとせば、終始物質的機械的因果關係の連鎖を辿りて、其の目的を達することが出來る。即ち、刺戟に應じて、一定の感覺器官の興奮を喚起し、一定の感覺神經によりて、之が大腦に傳達せられ、茲に一定の生理的興奮を惹き起し、更に一定の運動神經によつて、一定の筋肉の收縮を促す者として、全然物質的機械的生理的に之を解釋することが出來る。併し、其の際、此の運動の意義Sinn若くは價値Wert換言すれば、何故にWarum斯の如き運動を起し、かの問に對しては、刺戟に對して起りたる感覺聯想判斷意志等の、諸心的作用の一貫せる連鎖によつて之が說明を求むべきである。斯くて吾人は、正確なる論理的思索を進めて、精神的一元論及び心身並行說に則り、心身の大問題を、最も圓滿に解決すると同時に、生命の研究に當りて、よく自然科學と哲學との守るべき範圍を明かにし、且つ、此の兩者が、相待ち相助けて、始めて完全に其の研究の目的を達することを悟り得たのである。而して、生命研究の眞諦は、殆んど、之に盡きて居るが、併し、猶論及せざるべからざる大切なる一問題が殘つて居る。夫は何んであるかと云ふと、生物に於ける合目的性の問題である。

生活體に於ける合目的性と追目的性

生活體は、目的に適合する巧妙なる性質、即ち所謂合目的性Zweckmäsigkeitと、目的を追及して行動する性質、即ち所謂追目的性Zielstrebigkeit

とを具へて居る。而して、是れ實に、心身の大問題と共に、生活現象の自然科學的・機械的說明を嘲り、人をして、相率ひて生氣說に趨らしめし重大なる原因をなしたのである。而かも吾人は、今や心身の大問題を氷釋し去つたのである。玆に於てか、百尺竿頭更に一步を進めて、此の重要なる合目的性の問題を解決せんと欲するのである。

合目的性なる者は、心身の問題と等しく、人をして、完結せる因果律を忘却せしめて、最も屢、內的・非空間的・精神的解釋法と、外的・空間的・物質的解釋法とを混亂せしめ、其の結果、救ふべからざる誤に陷らしむる者である。這般の關係を論するに當りては、先づ「目的」てふ者の概念を明かにして置く必要がある。抑「目的」なる者は、全く一個の精神的概念であつて、意識と交涉を有つことによつて、始めて明瞭なる意義を有することになる。隨て、徹頭徹尾、主觀的のものであつて、決して客觀的の者でない。目的なる概念の內容は、自己の意識的思考若くは行動によりて知らるゝ者であつて、思考により、或は行動によつて、之を實現せしめんと力むる表象、是れ即ち「目的」Zweck であり、之を實現せしむる爲に必要なる行動、是れ即ち「手段」Mittel である。又此の出來事の連鎖を、始に遡れば、目的は「起因」Grund 若くは、「動機」Motiv であつて、手段は「繼起」Folge であらねばならぬ。今若し、此の精神的因果律の觀察を、物質的因果律の觀察に換ふるならば、目的即動機は、「原因」Ursache にして、手段乃至繼起は、「結果」Wirkung なる概念となるべきである。此の主觀的概念系統と、客觀的概念系統とは、截然として之を區別し、決して之を混同してはならぬ。隨つて若し、原因結果の概念中に、目的・動機、若くは手段・繼起等の概念を交ゆるならば、是れ實に論理上許すべからざる誤謬である。而して目的論を主張せる生氣說學徒は、不知不識、皆な此の誤謬に陷つて居るのである。

今、人間に於ける目的行爲に就て之を見るに、一定の目的表象 Zweck-

vorstellungが動機となりて、之れが繼起として、數多の精神作用が續出し、終に其の目的を現實せしむるのである。翻つて之を客觀的物質的概念によりて解析すれば、目的表象なる者は、即ち之に匹敵すべき大腦の生理作用に相當し、之に繼いで、神經系及び筋肉に於て、逐次、一定の生理作用が喚び起され、終に運動を起し、外物に作用するに至る者であつて、是れ即ち繼起に匹敵すべき生理作用である。斯く客觀的に之を觀察するに際しては、何處迄も物質的因果律によるべき者で、決して主觀的精神的概念を混入すべき者でない。併しながら、吾人は、經驗上、一定の意志には、常に一定の運動が喚び起さるゝことを見て、此の意志を以て、直ちに、其の運動の直接の原因と見做し、完結せる因果律を破りて、毫も怪まない。是れ畢竟、內的主觀的觀察に於ては、意志が最も著しく認識せられ、他の心的作用は、殆んど之を覺らず。又、外的客觀的觀察に當りては、運動のみが目立ちて感知せられ、腦及び他の神經系に於ける生理作用は、毫も之を感ずることがないから、此の顯著なる意志と、運動とを結び附けて、直接に、因果關係を有てる者と考ふるからである。斯くて、目的表象が、身體的行動の直接原因となり、或は行動が、新なる表象の原因と見做さるゝ樣になる。而して斯く考ふることは、如何にも解り易く、且つ便利ではあるが、併し嚴正なる認識論の上より見れば、看過すべからざる大なる誤謬である。

次に動物に就きて、此の關係を考ふるに、客觀的に、一定の自然現象、例へば運動せる物體が、其の身體に觸れたり、或は、「エーテル」の波動が、其の眼底に達したりすると、一定の表情運動や、遁逃運動や、其の他の運動が、之に續いて起つて來る。吾人は之を刺戟 Reiz 及び反應 Reaktion なる語で言ひ表はして居る。而かも吾人は、之を以て足れりとせず、必ず、自己の經驗に鑑みて、此の行動を、意識作用に結び附け、其處に感覺・感情・目的・表象等の精神的因子を挿み、反應を以て合目的性の者となし、

動物が、自己の意識せる目的に協へる行動を取る者と判斷する。而して、其の動物の階級の高下に從ひて、意識の之に關與する程度の相違を豫定して、本能 Instinkt、衝動 Trieb、自立性 Automatie、反射 Reflex、機轉 Mechanismus 等の語を用ゐて、之を發表して居る。而かも其際、何れにせよ、常に合目的性の存在を認め、加之、全然意識を缺ける植物に對してさへも、此の概念系統を適用して、合目的性反應、合目的性構成、合目的性生活機能等の語を使つて、其の現象を言ひ表はして居る。茲に至つては、主觀的精神的でなければならぬ目的なる者の本來の概念は、全然閑却されて仕舞つた者と言つていゝ。

而かも、生命即ち精神と速斷せる人間は、一朝生物界を辭して、無機界に入ると、茲に目的なる概念の起源に想著して、全然目的觀を却ける。化學作用や、物理作用を見て、何人も、夫れが合目的性であるとは言はない。併しながら、想像を加へたり、原始的の思考法によれば、茲にも亦、目的に適合せる多數の出來事を描き出すことは、極めて容易である。實際、自我の念强烈なる人間は、人間的色眼鏡をかけて、宇宙間の諸現象を觀察し、爲に往々大なる誤に陷る者である。天體の規律正しき旋轉、五風十雨の宜を得たる順和、穀物菜蔬の潤澤なる蕃茂等、凡て是等の自然現象は、皆な自己に利益を齎らす爲に成されたる天惠であると想定する。而して斯の如き有意的行動は、生なき自然物に於ては、到底考ふべからざることであるから、茲に於てか、或は神とか、或は天とか、或は造物者とか云ふ者を認め、其の支配によつて、斯かる合目的性の現象が起る者と考ふるに至るのである。

併しながら、己に述べし如く、目的なる概念は、元來純主觀的の者で、意識を離れては到底存在することの出來ない者たる以上、其の適用の範圍も亦、極めて限ぎられたる者で、目的に適合せる意識的行動が、確かに合目的性の根源たることを明かにし得る場合でなければならぬ。然ら

Teleologie

さる場合は、縱令、夫れが、一見合目的性の者と思はるゝ場合でも、宜しく主觀的精神的概念を廢し、寧ろ客觀的・物質的概念を用ゐて、機械的に之を解釋すべきである。換言すれば、目的論 Teleologie に代ふるに、因果律 Kausalitätsprinzip を以てすべきである。然り而して、內的・主觀的・精神的概念より成れる目的論は、寧ろ哲學の領域に屬すべき者であり、外的・客觀的・物質的概念によりて築かれたる因果律は、勢ひ自然科學の取り扱ふべき者でなければならぬ。而かも、已に述べたる、完結せる因果律の法則に從ひて、精神的と物質的の此の二樣の概念系統は、互に並行するも、各其の獨立を保ち、決して混亂することがあつてはならぬ。即ち、客觀的因果律を以て說明する場合には、終始、物質・力「エネルギー」等の諸概念が、因果的關係の連鎖を形ち造つて、其の間に、聊かたりとも目的觀が混入することを許さぬ者である。之に反して、主觀的・目的論を以て解釋を試むる場合には、目的とか、手段とか、乃至起因とか繼起とかの精神的概念を以て、一貫せねばならぬ。

因果律に從へば、あらゆる出來事は、限なき網の目の樣に、因果的關係を有つて居る。隨つて、一の出來事は、其以前に起れるあらゆる出來事の必然的結果である。故に、之が解釋を行ふ爲には、無數の近因・遠因・即ち無數の條件を、悉く喚び來つて、其の因果關係を明かにせねばならぬ。而かも斯のことは、往々殆んど不可能の難事である。今、生活現象の研究に關して之を考ふるも、內的・外的の複雜なる無數の條件の外、尙ほ、系統發生に際して、幾百億年の悠久なる歲月を經過せし間に起れる、あらゆる條件をも攻究せねばならぬ。而して、其の條件の一が缺けても、因果の連鎖は茲に中斷せられて、滿足なる說明を得ることは出來なくなるのであるから、其の研究の困難なることは、實に言語に絕して居る。茲に於てか、動もすれば、失念落膽して、因果律を以てしては、到底生命問題を解決すること能はずとなして、他の解釋法を試み樣とするに至

るのも、無理ならぬ次第である。是れ即ち、ベールの如き、ウィルヒヤウの如き、フンボルトの如き、ドゥリーシュの如き、偉大なる自然科學者をして、期せずして、終に生氣説に投ぜしめし所以である。

斯かる場合に、人が、因果律を捨てゝ、最も屢、其の代りに採らんとする解釋法は、目的論である。因果律にありては、諸條件の作用の必然的歸結 Notwendige Folge と云ふ概念が、其の根柢をなして居るが、目的論では、各條件の合目的性と云ふ概念が、其の基礎を形ち造つて居る。斯かる諸條件あるが故に、斯る結果を齎らすと云ふ、冷靜なる研究的態度と、歸納的方針とを取れる因果的説明に反して、始めから、一定の目的を定めて、此の目的に適合すべく、斯る手段を取るのであると説く目的論は、斷獨的である。演繹的である。而かも、所謂鹿を逐ふ獵夫は山を見ずで、あらゆる自然現象は、目的を追ふて行はるゝ者と考ふる目的論者の眼には、何等の懷疑的批判的態度もない。彼等は、無數の自然現象の中より、勝手に、主觀的目的觀を滿足せしむべき内容を選擇し、而して、之れに、目的と手段との概念を適用して、容易く説明を與ふることによつて、一見、根本的認識を得たかの如き滿足を買ふことが出來る。斯くて、如何なる難解の問題も、目的論の前には、忽ち氷釋し去るかの如き感がある。之を、面倒なる、嚴格なる、因果律に比較すれば、目的論は如何にも便利である。自由である。

併しながら、茲に、吾人は、一歩退いて沈思熟考せねばならぬことがある。已に述べた樣に、目的なる概念は、徹頭徹尾、内的主觀的の者である。意識を離れて、『我』を離れて、到底存在することの出來ない者である。之を客觀化することは出來ない者である。之を外界に於ける事物其の者に附帶せしむることは出來ない者である。此の點に於て、目的なる概念は、物質力「エネルギー」原因等の概念と、大に趣を異にして居る。

斯く、目的觀は、純主觀的のものたる以上は、之を適用すべき範圍は、

目的を想定する意識が、確かに目的に適ふ行動の根源をなせる場合にのみ限ぎらるべきである。隨つて、意識の共働なしに行はるゝ凡ての現象は、目的論によつて之を解析すべき者でなくして、因果律によつて之を説明すべきである。併しながら、此の制限を越えて、意識を有せざる物質界の現象を説明すべく、目的觀を適用することも、時として認容せねばならぬ場合がある。但し、其の場合には、常に注意を拂つて、目的觀は、純主觀的の者で、之が適用には、一定の範圍と、一定の制約とを設けねばならぬこと。隨つて、之れと、因果的説明とを混亂し、完結せる因果律を中斷せしめざることを、念頭より去らしめぬ樣に心懸けねばならぬ。此の前提の下に、自然現象に、目的觀を適用することは、啻に過失でなきのみならず、之によつて、生命問題の如き、因果律を以てしては、容易に解析すべからざる複雜なる現象に、一貫せる説明を與へて、吾人の認識を滿足せしめ得る利益がある。將た又單に客觀的に、自然現象を記載し説明する外に、其の意義と價値とを認めしむる上に於て、頗る興味がある。さり乍ら、若し此の注意を怠り、目的論を、其の適用すべき範圍を超え、制約を無視して、何等顧慮する所なく、之を物質界の諸現象の説明に適用し、加之、內的・主觀的・精神的・觀察法と、外的・客觀的・物質的觀察法とを混亂し、因果的説明の困難とする所を、目的論により て解釋せんとして、完結せる因果律の連鎖を破ることあらば、是れ斷じて許すべからざる誤謬である。而して、目的論を標榜して生氣説を主張せる人々は、皆な此の大なる誤謬に陷つて、毫も覺らずに居る。

生活體の追目的性に關しては、ペール氏以來、生活體が、其の發生に際して、一絲亂れず、よく其の複雜極なき經路を辿つて誤らないことを擧げて、其の證據として居る。併しながら、吾人は、此の追目的性に就きても亦、既に合目的性に關して述べたる所の者を以て、正當なる批判を之に下し得ると信ずる。即ち一定の目的を追及して行動する追目的性

なる概念は、獨り、確實に意識の干渉ある生活現象にのみ限ぎりて、適用せらるべき者であつて、意識が直接に關與せざる場合に在りては、悉く、之を因果律によつて說明することが正當である。而かもベール氏始め、其の他多數の生氣說を唱ふる人々は、發生の事實の如き、全然無意識的に行はるゝ出來事であつても、夫れが、生活體に於て行はるゝ以上、其の終局を以て、目的と見做し、終局に至る迄の種々なる出來事を、此の目的を追及する手段と心得て居る。併し、斯の如きは、畢竟、各自の主觀的・內省的思考を、直ちに、外界の出來事に推し及したもので、何等、客觀的に正當なりと主張すべき資格も理由も有つて居ない。

已に述べし如く、論理上、心身無差別說が眞理であり、且つ又、心身竝行說が正當である以上は、生活體を、一の物質として、外的・客觀的に觀察するに當りては、あらゆる生活現象を、空間的・物質的概念に導きて、因果律に從つて之を說明せねばならぬ。即ち發生の事實の如きも、內的・有機的素因たる遺傳物質と、外的關係より起る、順應・淘汰等の諸現象の、因果的關係より導かれたる、必然的結果として、何處迄も、機械的に之を說明すべきであり、而して又、實際、進化論によりて、之が機械的說明に端緒を與へられ、輓近に於ける實驗遺傳學、及び生物測定學の長足の進步は、之に向つて、多大なる貢獻をなし、遺傳及び變化性てふ、發生の根本問題を、數學的精密を以て、機械的に解釋し得るに至つたのである。若し又、生活體を、內的・主觀的に觀察する時は、發生の事實に於て、合目的性乃至追目的性を認め、宜しく、其處に、發生の意義と價値とを嘆賞すべきである。

而かも、其の際、寸時も忘却してはならぬことは、因果的說明と云ひ、目的論と云ひ、畢竟、唯一事項を、二樣の見地に立ち、二樣の概念系統に導きて、之を解釋せんとしつゝあるに外ならぬことで、隨つて此の兩者を混亂し、完結せる因果律を破つたり、或は、因果的說明と、目的論

とを以て、全然相容れざる、反對の者と見做す樣な、誤謬に陷らぬ樣に、吳々も注意せねばならぬ。此の故に、發生に際して現はるゝ、諸事實の、外的・物質的・觀察に於て、目的觀を挿みて、因果律の連鎖を中斷し、加之、因果的說明を以て、發生事實の解釋に向つて、無爲なる不合理なる者となし、目的論によつてのみ、之れが解決を期すべきものとなすが如きは、全然誤つて居る。而して、發生に關して、自然科學的研究を拒み、目的論を以て之に代へんとする生氣說論者は、何れも、此の許すべからざる過失に陷つて、而かも之を以て眞理と心得て居る。

由是觀之、本來、一の前提を設くることなく、冷靜無私なる研究的態度を取りて、自然界に於ける諸現象に、物質的・空間的觀察を施こし、客觀的・歸納的に之を解釋せんと力むる、自然科學の取るべき方針は、必ずや、目的論でなくして、因果律でなければならぬ。苟も客觀的・物質的見地より論ずる以上は、夫れが、生活體に於て表はさるゝ複雜極りなき生活現象であらうとも、無機界に於けると同一の概念系統、同一の理法に基きて、諸條件の連鎖を迎り、因果律に從つて、之を解釋すべきである。如何に夫れが困難であらうとも、決して失望してはならぬ。又、たとひ今日其の解決が不可能であらうとも、其の方針と方法とに大なる信賴を排ひ、將來の成功に向つて、十分努力せねばならぬ。併しながら、一定の範圍內に於て、一定の制約の下に、內的・主觀的見地より、生活現象の說明に目的觀を適用するも、亦敢て妨げない。而かも其の場合には、よく其の立ち場を忘れない樣にして、目的論を以て因果的說明を排斥したり、或は此の兩樣の概念系統を混亂して、完結せる因果的連鎖を中斷してはならぬ。意識を離れて、將た、行動し說明しつゝある『我』を外にして、一の合目的性もなく、追目的性もなく、また、自立性もない。目的觀は、徹頭徹尾、主觀的・主我的の者である。此の明瞭なる認識あるものにして、始めて、目的論を唱へて、よく過なきを得るのである。

結論

予輩は、今や、條を逐い、頂を重ねて、玆に結論の筆を執ることゝなつた。げに變遷反復極なき人間の思想は、振子の如く、將た螺旋の如き者である。而かも搖いて止まざる振子も、終には停まるべき中心があり、旋轉盡くることなき螺旋にも、毫も動かざる中軸がある樣に、人間思想の變遷の歷程を辿つて見ると、自から到達すべき眞理、歸着すべき大本のあることを悟るのである。

「心」と「物」、「精神」と「身體」、「我」と「外界」、「神」と「自然」、噫、是れ、人間に與へられたる、最も遠くして最も近く、最も古くして最も新らしき、大なる謎である。知慧の實を食つた人の子の、小賢しき振舞を嘲るかの樣に、長しへに人生の彼方に横はつて居る不可思議なる謎である。此「スフインクスの謎を解いて、至高の月桂冠を頭に加ふべく、知識の二大選手として、哲學と自然科學とが相競ひ相爭つた。其の爭は、生命の分野に於て、尤も激烈であつた。蓋し生命は、「心」と同時に「物」であり、「精神」と共に「身體」を成し、「我」と「外界」との對峙を起し、「神」を見又「自然」に接するからである。久しかりし哉其の爭や、而して、今猶其の戰は鬪はれつゝある。彼等の或る者は、進んで、機械說の劍を握つて奮鬪した。自然科學者の多くは夫であつた。他の者は、退いて、生氣說の楯に隱れて安きを求めた。哲學者の多くは夫であつた。

而かも、大なる戰鬪の後には、大なる平和が來らねばならぬ。此の重要なる使命を齎らすべく、女神は漸くにして起つた。精神的一元論の女神は、今や、自然科學と哲學との間に、同盟を結ばんが爲に起つた。否、新らしき科學と、新らしき哲學との、溫かき握手の裡に、此の尊き女神が生れ出でたのであつた。

精神的一元論、竝びに、之に基ける心身竝行說は、空想的臆說でない。

「嚴正なる論理的思索と、愼重なる認識的批判とによりて、人々が必然到達せねばならぬ最後の結論である。吾人は、之に依つて、始めて、心物の關係を根本的に理解することを得、是に由つて、始めて、生命研究の眞諦を覺ることが出來た。

實在せる者は唯一である。「精神」と云ひ、「身體」と云ひ、「我」と云ひ、「外界」と云ふ、畢竟、唯一本體に、二樣の解釋法、二樣の概念系統を施こずことによつて起つた、對峙に外ならぬ。即ち、唯一本體に、空間的・物質的・客觀的概念を與へて、これを客觀化する時は、「身體」となり、「外界」となる。之に反して、非空間的・非物質的・主觀的觀察によりて、唯一本體が、直接自己を見る時、「精神」となり、「我」となるのである。

然り而して、一旦、相異なれる二樣の見地に立ちて、之を觀察し、二樣の概念系統によりて、之を解釋せる以上は、完結せる因果律に從ひて、物質界のことは、終始一貫、物質・力「エネルギー」・空間・時間等の概念の、因果的連鎖によりて、機械的に之を說明すべく、其の間に、主觀的概念を挿んで、此の連鎖を中斷してはならぬ。而して、是れ實に、自然科學の本領である。此の意味に於て、生活體に於て見らるゝ生活現象は、如何に夫れが複雜にして、其の因果的說明が、非常に困難であらうとも、將た、如何に夫れが靈妙を極め、一見、目的觀によりてのみ、最もよく解釋せらるゝが如き感があらうとも、苟も、自然界に於ける一現象として、客觀的・自然科學的に之を觀察するに當りては、無機界に於けると同一の法則、同一の原理を之に適用して、何等の不合理もなく、何等の矛盾もない。されば、生活現象を研究の對象とせる、生物學・生理學が、其の立脚地を、物理學・化學の上に求め、之によつて、機械的說明を主張しつゝあるのは、固より理の當然である。吾人は、須らく、駸々乎として底止する所なき、自然科學の進步に依賴し、輓近實驗生理學の方針を確信し、眞理擁護の爲に、極力生氣說を擊退せねばならぬ。「エレラレヒア」Entle-

lechia を呼び、「ヴィタ、アニマ」Vita anima を呼び、「ナチュラ」Natura を呼び、形成慾 Bildungstrieb を呼び、凡て此等の物理學・化學以外に立てる、不測の勢力、乃至、神秘なる法則を藉り來るにあらざれば、到底、生活現象を解釋すること能はずとなし、自然科學の上に基礎を置ける、實驗生理學を嘲り、以て學術の進歩を阻止し、迷想の種子を培はんとする生氣說學徒は、飽く迄之を排斥せねばならぬ。彼等の病根は、一に認識的修養の不備なるに座して居る。彼等は、「心」と「物」との對峙に關して、何等知る所がない。彼等は、完結せる因果律を破り、「エネルギー」不滅則を無視して、恬として省みない。彼等は又、守るべき範圍を越え、取るべき制約を忘れつゝ、目的論を亂用して、毫も自から覺らずに居る。

然らば即ち、獨り自然科學的機械的說明によつて、生命の眞相を知悉し得るやと云ふに、吾人は、生氣說學徒に非ざるも、直ちに之に對して、否と答ふるに躊躇しないのである。自然科學の對象とする所は、物質界

現象界である。同一不二なる本體を、外的客觀的に觀察し、物質力「エネルギー」等の如き、空間的・物質的概念を適用し、因果律によつて之を解釋せんとするのである。內的・精神的生活は、到底、自然科學によりて知ることは出來ない。其處に打越す能はざる境界がある。此のことは、已述の如く、デゥボア、レイモン氏が、明瞭に指摘した所である。若し、自然科學者にして、其の本分を忘れ、此の守らざるべからざる境界を侵さんが、其の結果は忽ち破滅である。淺薄なる唯物論者の敗北は、即ち其の適例である。

元來、自然科學の本領とする所は、物質界であらねばならぬ。隨つて、實驗生理學が、內界・精神界を解釋する能はざるは、寧ろ當然のことである。吾人は、毫も、此故を以て、實驗生理學に對して疑惧の念を懷き、茲を去つて、生氣說に趨くの理由を見出すことは出來ぬ。將た又、デュボア、レイモン氏の述べし如く、自然科學以外に立てる領土を Ignoramus et Igno-

bimusとなして、放棄する必要もない。自然科學の爲し能はざる所は、宜しく、哲學の助を喚び來りて、主觀的・非物質的・非空間的概念たる、感覺・表象・概念・衝動等の統一的關聯によりて、內的・精神生活を研究し、生命の內に含蓄せる、大なる內容・意義・價値（インハルト・ベドイテング・ヴェルト）を了解することを、力めなければならぬ。釋迦基督の經典も、李白ゲーテの詩集も、ビトーフェンの「ジンフォニー」も、ラファエルの「マドンナ」も、之を純物質的・客觀的に觀察すれば、單に文字の羅列である。音波の共鳴である。色彩の結合である。其の崇高なる意義と、其の偉大なる價値とは、到底、之によつて窺ひ知ることは出來ぬ。自然科學によりては、所詮、宇宙の半面しか見ることが出來ぬ。他の半面を吾人に示す者は、哲學である。

自然科學と哲學との調和は、實に刻下の大問題である。凡そ偉大なる哲學思想なくして、決して偉大なる科學は起らない。萬有科學の基礎を、なせる、アトム論は如何。進化論は如何。勢力不滅說は如何。是れ皆、希臘の昔に於て生れ出でたる哲學思想が、自然科學に、血と肉とを與へて發達した者に外ならぬではないか。將た又、堅實なる科學の知識なくして、決して堅實なる哲學は生れない。徒らに瞑想を縱にし、空想に走るは、眞正なる哲學の本領でない。必ずや、事實を重んじ、經驗に基きて、確實なる論理的批判の上に立ちて、其の論步を進めねばならぬ。此の意味に於て、ヘッケルの言つて居る樣に、あらゆる眞正の哲學は、自然科學であり、あらゆる眞正の科學は、又、自然哲學であらねばならぬ

人間に與へられたる至高至大の謎を解くべく、人類が有せる究極の目的を現實すべく、自然科學と哲學とは、茲に其の久しき爭を止めて、永遠の同盟を結ばねばならぬ。斯の如くにして、人は、始めて、圓滿なる世界觀と、健全なる人生觀とに到達することが出來る。而して、是れ實に、生命研究の眞諦であらねばならぬ。

生物學と哲學との境 終

一月普現一切水　一切水月一月攝

攝　論

生物學と哲學との境 奥付

不許複製

大正五年四月廿五日印刷
大正五年四月廿八日發行

【定價金三圓八拾錢】

著者　永井潛
發行者　河本龜之助　東京市麹町區平河町五丁目三十六番地
印刷者　河本俊三　右同町一番地
印刷所　洛陽堂印刷所　東京市麹町區麹町二丁目九番地

發行所　電話番町四二五八番　振替東京二〇九一四　洛陽堂　東京市麹町區平河町五丁目

東京帝國大學醫科大學教授 醫學博士永井潛先生著

改版 增補 內容一新

生命論

（四版出來）

生命に關する思想變遷の歷程を繹ね、最新自然科學の見地より生活現象に向ひて明晰なる解釋を下し、殊に實驗遺傳學說の如きは叙說の巧妙さながら掌を指すが如く、而して之に附するに、生命人造論として世界に喧傳せしシエファー氏論文を以てし、錦上花を添ふるの感あらしめし生命論は、今や版を新たにするに當りて更に幾朶の花を加へたり。曰く膠質化學と生活現象曰く原素の循環と空中窒素の利用曰く榮養の眞相と食物の人造曰く觸媒作用と醱酵素就中防禦醱酵素と姙孕及び病の血清診斷の如き人間に於ける遺傳と人種改善學の如き、一は醫學界に於ける一新生面を開拓して近世學壇の耳目を驚かし、一は永遠の福祉を人生に齎すべき一大使命を帶びて新たなる活動を始め、天下經世有識の士をして齊しく思を致さしむるもの、斯くて六百餘頁の尨然たる大冊子一度卷を繙けば讀了せずんば止まざらしむ。尙序文に於て著者に生命論に反駁者を反駁し、且つ終に詳細なる索引を附せり。

菊判六百餘頁 挿畫四十九枚 純白布製天金箱入 價三圓三十錢 稅十六錢

發行所 東京市麹町區平河町五丁目卅六番地 振替貯金口座東京二〇九一四番 洛陽堂 電話番町四二五八

後